四箇古川遺跡 1

— 第３次・第４次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1077集

2010

福岡市教育委員会

四箇古川遺跡 1

— 第３次・第４次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1077集

遺跡略号　SHK-3（第３次調査）
　　SHK-4（第４次調査）
調査番号　0764（第３次調査）
　　0843（第４次調査）

2010

福岡市教育委員会

調査区遠景（南より）

調査地点遠景（北より）

第４次Ａ区全景（北より）

1．第 4 次 A 区埋甕出土状況（西より）

2．第 4 次 A 区出土埋甕

1．第４次Ｂ・Ｃ区全景（上が南）

2．第４次Ｂ区全景（上が南）

3．第４次Ｃ区全景（上が南）

序

福岡市は玄界灘に面し、古代より大陸・半島との交流が絶え間なく行われてきました。その地理的・歴史的要因から福岡市域には縄文時代から中世にかけての大規模な遺跡が多数存在します。近年の著しい都市化による開発により失われるこれらの文化財を後世に伝えるのは、本市教育委員会にとっての重要な責務であります。

本書は、市道改良工事に伴い発掘調査を実施した四箇古川遺跡第3次ならびに第4次調査について報告するものです。今回の調査では弥生時代の竪穴住居・溝などを検出するとともに、縄文時代から中世にかけての土器・石器が出土しました。これらは早良平野の歴史を解明する上で重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の一資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまで深いご理解と多くのご協力を賜りました。心から謝意を表します。

平成22年3月23日

福岡市教育委員会

教育長　山田　裕嗣

例　言

1．本書は福岡市教育委員会が市道四箇内野線道路改良工事に伴い、福岡市早良区四箇4・5丁目地内において実施した発掘調査である四箇古川遺跡第３次ならびに第４次調査の報告書である。
2．本書に掲載した遺構実測図は阿部泰之（第３次調査）、今井隆博・山田ヤス子（第４次調査）が作成した。
3．本書に掲載した遺物実測図は阿部・平川敬治（第３次調査）、今井・山口譲治・山口朱美・米倉法子（第４次調査）が作成した。
4．本書に掲載した挿図の製図は阿部（第３次調査）、今井・山口朱美・米倉（第４次調査）がおこなった。
5．本書に掲載した写真は阿部（第３次調査）、今井（第４次調査）が撮影した。
6．本書で用いた方位はすべて磁北で、真北より6°30′西偏する。
7．遺構の呼称は竪穴住居をSC、溝をSD、土壙をSK、ピットをSP、炉跡をSR、不明遺構をSXと略称する。遺構番号は発掘調査の際、現場で任意に振った通し番号を原則そのまま用いている。
8．本書に関わる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
9．本書の執筆・編集は第３次調査を阿部、第4次調査を今井が行った。
10．本書掲載の埋蔵文化財包蔵地の範囲は平成６年３月現在の推定線で、現在は変更されている可能性がある。詳細は福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課に確認されたい。
11．本書で報告する調査の細目は以下の通りである。

調査番号	遺跡略号	調査面積	調査期間
0764（第3次調査）	SHK-3	600㎡	2008.2.4～2008.3.31
0843（第4次調査）	SHK-4	2200㎡	2008.10.1～2009.3.10

本文目次

はじめに …… 1
1．調査に至る経緯 …… 1
2．調査の組織 …… 1
第1章　遺跡の立地と環境 …… 2
第2章　第3次調査の記録 …… 5
1．調査概要 …… 5
2．遺構と遺物 …… 5
第3章　第4次調査の記録 …… 21
1．調査の概要 …… 21
(1) 調査の経過 …… 21
(2) 調査の方法と各区の概要 …… 21
2．A区の調査 …… 22
(1) 調査の概要 …… 22
(2) 遺構と遺物 …… 22
3．B区の調査 …… 28
(1) 調査の概要 …… 28
(2) 遺構と遺物 …… 28
4．C区の調査 …… 34
(1) 調査の概要 …… 34
(2) 遺構と遺物 …… 35
5．D区の調査 …… 40
(1) 調査の概要 …… 40
(2) 遺構と遺物 …… 40
6．E区の調査 …… 47
(1) 調査の概要 …… 47
(2) 遺構と遺物 …… 47
7．石器 …… 49
8．まとめ …… 52

挿図目次

第１章

第１図　四箇古川遺跡と周辺の主な遺跡（1/50000）…… 3
第２図　調査地点と周辺の調査区（1/4000）…… 4
第３図　調査区位置図（1/1000）…… 折込

第２章

第４図　第３次調査区全体図（1/200）…… 折込
第５図　１区南壁土層断面実測図（1/60）…… 5
第６図　SK01実測図（1/30）…… 6
第７図　SK01出土縄文土器実測図（1/3）…… 6
第８図　１区SK02・03実測図（1/30）…… 7
第９図　１区ピット出土土器実測図（1/3）…… 8
第10図　遺構検出面出土遺物実測図（1/3、6のみ1/1）…… 8
第11図　２区東壁土層断面実測図（1/60）…… 9
第12図　SB102・103実測図（1/60）…… 10
第13図　SB103出土土器実測図（1/3）…… 10
第14図　SC301実測図（1/60）…… 11
第15図　SC301出土遺物実測図（1/3）…… 11
第16図　SD101実測図（1/60）…… 12
第17図　SD101出土遺物実測図（1/3）…… 12
第18図　SX145実測図（1/60）…… 13
第19図　遺構検出面出土遺物実測図（1/3）…… 13
第20図　SX145出土土器実測図（1/3）…… 14

第３章

第21図　Ａ区東壁土層図（1/60）…… 22
第22図　Ａ区全体図（1/200）…… 折込
第23図　埋甕出土状況実測図及び埋甕実測図（1/10、1/3）…… 23
第24図　SK03・08・10・13・14実測図（1/40）…… 24
第25図　SK16・18実測図（1/40）…… 25
第26図　Ａ区出土遺物実測図（1/3）…… 26
第27図　Ｂ区西壁土層図（1/40）…… 28
第28図　Ｂ区全体図（1/200）…… 折込
第29図　SC101・103・108実測図及び出土遺物実測図（1/60、1/3）…… 29
第30図　SD128・151断面図（1/40）…… 30
第31図　SD155実測図（1/60）…… 30
第32図　SD128・155出土遺物実測図（1/3）…… 31
第33図　SX158・ピット出土遺物実測図（1/3）…… 32

第34図　その他の出土遺物実測図（1/3）…… 33
第35図　C区東壁土層図（1/60）…… 34
第36図　C区全体図（1/150）…… 折込
第37図　SK220・261・262・263実測図（1/40）…… 35
第38図　SK220・261・262出土遺物実測図（1/3）…… 36
第39図　SX275出土遺物実測図（1/3）…… 36
第40図　ピット出土遺物実測図（1/3）…… 37
第41図　包含層出土遺物実測図（1/3）…… 38
第42図　トレンチ出土遺物実測図（1/3）…… 39
第43図　D区東壁土層図（1/60）…… 40
第44図　D区全体図（1/200）…… 折込
第45図　SD307断面図（1/40）…… 41
第46図　SD304・307出土遺物実測図（1/3）…… 41
第47図　SD363実測図（1/60）…… 42
第48図　SK357・376実測図（1/40）…… 42
第49図　SK357・376出土遺物実測図（1/3）…… 43
第50図　ピット出土遺物実測図（1/3）…… 43
第51図　SX311・339・375出土遺物実測図（1/3）…… 44
第52図　その他の出土遺物実測図（1/3）…… 45
第53図　トレンチ出土遺物実測図（1/3）…… 46
第54図　E区東壁土層図（1/60）…… 47
第55図　SD501出土遺物実測図（1/3）…… 47
第56図　E区全体図（1/200）…… 48
第57図　出土石器実測図①（1/1、1/2）…… 50
第58図　出土石器実測図②（1/1）…… 51
第59図　出土石器実測図③（1/2）…… 51

写真目次

巻頭図版1　調査地点遠景（南より）
巻頭図版2　調査地点遠景（北より）
巻頭図版3　第4次A区全景（北より）
巻頭図版4　1．第4次A区埋甕出土状況（西より）
　　2．第4次A区出土埋甕
巻頭図版5　1．第4次B・C区全景（上が南）
　　2．第4次B区全景（上が南）
　　3．第4次C区全景（上が南）

第２章

PL.1 …… 15
１．１区南半全景（北より）　２．１区北半全景（南より）　３．１区東壁土層（西より）
PL.2 …… 16
１．SK01（北より）　２．SK02（東より）　３．SK02土層（北より）
PL.3 …… 17
１．SK03（東より）　２．SK03土層（南より）　３．２区南半全景（南より）
PL.4 …… 18
１．２区北半（拡張前）全景（南より）　２．２区北半（拡張部）全景（南より）
３．２区東壁土層（西より）
PL.5 …… 19
１．SB103（北より）　２．SB102・SD101（南より）　３．SD101土層（A-A′）（北より）
PL.6 …… 20
１．SD101土層（B-B′）（北より）　２．２区西側調査区全景（南より）
３．SC301（南より）

第３章

PL.7 …… 53
１．A区遠景（北より）　２．A区全景（北より）
PL.8 …… 54
１．A区埋甕①（西より）　２．A区埋甕②（西より）　３．A区埋甕③（西より）
４．A区埋甕④（西より）　５．A区埋甕⑤（西より）　６．A区埋甕⑥（西より）
PL.9 …… 55
１．SK03（北より）　２．SK09・10・11（東より）　３．B区・C区遠景（北より）
PL.10 …… 56
１．B区と飯盛山（東より）　２．B区北半全景（北より）　３．B区南半全景（北より）
PL.11 …… 57
１．SC103（北より）　２．SC108（東より）　３．SD128（東より）
PL.12 …… 58
１．B区・C区遠景（南より）　２．C区全景（上が南）　３．SK220（西より）
PL.13 …… 59
１．SX275土層（西より）　２．D区・E区遠景（北より）　３．D区全景（上が南）
PL.14 …… 60
１．D区と飯盛山（東より）　２．SD307（北より）　３．E区全景（上が南）
PL.15 …… 61
出土遺物Ⅰ（縮尺不同）
PL.16 …… 62
出土遺物Ⅱ（縮尺不同）

はじめに

１．調査に至る経緯

福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課（以下、埋文1課）は、早良区役所地域整備部地域整備課（以下、早良区地域整備課）から早良区四箇4・5丁目地内における市道四箇内野線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の事前審査について、2007（平成19）年11月28日付で依頼を受けた（事前審査番号19-1-105）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である四箇古川遺跡に含まれていることから、埋文1課は当該地で平成19年12月12日から複数回にわたって確認調査を実施し、その結果、柱穴・土壙・溝などの遺構が検出された。この成果によって、道路建設予定地のうち、遺構が確認された範囲について発掘調査を実施することとなった。早良区地域整備課との協議の結果、発掘調査は２次にわたって行うこととし、平成20年２月４日から３月31日までを第３次調査、平成20年10月１日から平成21年３月10日までを第４次調査とした。資料整理・調査報告書作成は平成21年度にまとめて行うことで合意した。なお、これらにかかる費用は、事業主体である早良区地域整備課より令達を受けた。

発掘調査は全期間を通じて大きな事故等もなく概ね順調に完了しました。紙上ではありますがここに記して関係者各位に深く感謝申し上げます。

２．調査の組織

事業担当：早良区役所地域整備部地域整備課
発掘調査：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課
調査総括：埋蔵文化財第２課　課長　　田中壽夫
　　同課調査第１係長　　杉山富雄
調査庶務：文化財管理課　　井上幸江（前任）　古賀とも子（現任）
事前審査：埋蔵文化財第１課事前審査係長　　吉留秀敏（前任）　宮井善朗（現任）
　　同係主任文化財主事　　宮井善朗（前任）　加藤良彦（現任）
　　同係文化財主事　　星野恵美（前任）　阿部泰之（現任）
調査担当：埋蔵文化財第２課調査第１係　　阿部泰之（第３次調査）　今井隆博（第４次調査）
調査作業：辻節子　西口キミ子　三谷朗子　木田ひろ子　梅野真澄　井上正通　浅井伸一　松本順子　中村宏　森下初美　西野光子　栗木昭孝　森広品子　近藤由美　檀田信一　田口恵子　倉光アヤ子　倉光京子　小柳和子　坂本八ツ子　永井ゆり子　山田ヤス子　高橋茂子　川岡涼子　吉鹿裕隆　脇山千代美　柴藤清志　横溝恵美子　田原忠昭　尾崎泰正　吉積百合子　野田英機　石井純子　小田義之　井上千穂　永松顕義　森野和子　吉野一憲
整理作業：窪田慧　黨早苗　鈴木諄子　樋口久美子　柴田加津子　萩本恵子

第１章　位置と環境

現在の行政区では福岡市早良区に当たる早良平野は、背振山系から西方に派生する西山・飯盛山・叶岳に南から西を限られ、東は油山から北に派生する低丘陵に囲まれる平野である。この平野は主に室見川とその支流によって開析された沖積平野で、現在は北部から幹線道路沿いに市街地化が進んでいるが、旧来広大な水田地帯であった。この沖積平野には室見側の支流によって複数の低地と微高地が形成されており、微高地上には縄文時代から中世にわたって集落が営まれている。四箇古川遺跡はこの微高地上に形成された遺跡のひとつである。

四箇古川遺跡は、縄文時代から中世にわたる遺構・遺物が検出される複合遺跡である。以下、周辺の遺跡を含めたところで時期ごとにその内容を概観したい。

縄文時代の遺構・遺物は、主に四箇古川遺跡の北に位置する四箇遺跡において前期～後期にかけての遺構・遺物が多く検出されている。とりわけ第６次調査地点では後期の「特殊泥炭層」が検出され、木製品等の有機質遺物が出土した。遺物包含層からの出土だが、第20次調査地点では土偶・硬玉製勾玉が出土しているほか、第22次調査地点では中期鷹島式土器がまとまって出土している。四箇古川遺跡においては縄文時代遺構・遺物の出土例は明確でなかったが、今回の調査でその存在が確認された。しかし住居址等明確な遺構は現在のところ未確認である。

弥生時代になると明確な遺構・遺物が急増し、一定規模の集落が営まれる状況が窺える。入部地区の圃場整備にかかる調査では前期の円形住居の検出が報告されている。今回報告する３次調査では松菊里タイプの円形住居が検出されており、前期末～中期初頭にかけての所産とみられる。東に位置する四箇船石遺跡第４次調査地点では中期後半頃の住居址が複数検出され、鎌・ヤリガンナ等鉄製品が出土しているが、後期にはいると遺構・遺物とも減少し、集落が縮小ないし移動する傾向が窺われる。

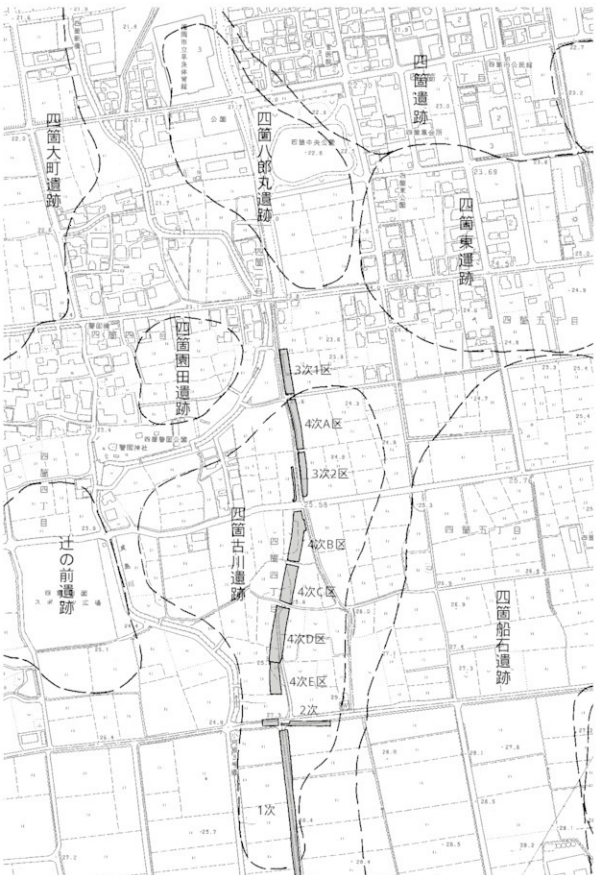
古墳時代には、入部地区の圃場整備にかかる調査で４世紀～５世紀にかけての住居址群が検出されている。のこりは悪く全体に大きく削平を受けている状況だが、その中には焼失住居とされるものが含まれる。水路や道路部分のみの調査で面的な広がりは不明確だが、一定規模の集落が形成されるものと思われる。低地部の調査では旧河川にしがらみが構築され、縄文時代から古墳時代後期にかけての遺物が出土している。

古代は入部地区の圃場整備にかかる調査で平安時代とみられる土壙墓が１基検出されている。その他周辺の遺跡を含め包含層から若干の遺物が出土しているが遺構・遺物とも僅少で、まとまった集落が営まれているとは現状では考えにくい。ふたたび遺構・遺物の増加をみるのは中世に入ってからである。

中世以降の遺構・遺物は多い。とりわけ入部地区の圃場整備にかかる調査では平安時代末～中世初頭頃とされる掘立柱建物・溝・土壙墓・井戸等が検出されている。掘立柱建物の規模は２間×３間が多く、総柱となるものも検出されている。方位は概ね揃えられ、建物に平行・直交する方向に溝が伸び、区画溝となる状況が窺える。土壙墓は特定の地点に集中せず、屋敷地の中に墓が営まれる。井戸には石組み井戸があり、素掘りないし桶組みの井戸が一般的ななかでは目立つ。当該期の河川跡も同時に検出されており、小川が流れる間の微高地に農村集落が営まれている状況がうかがわれる。

1．四箇古川遺跡　2．姪浜遺跡　3．藤崎遺跡　4．西新町遺跡　5．有田遺跡群
6．原遺跡　7．飯倉遺跡　8．野芥遺跡　9．免遺跡　10．次郎丸高石遺跡
11．田村遺跡　12．四箇遺跡　13．重留村下遺跡　14．重留遺跡　15．四箇船石遺跡
16．清末遺跡　17．東入部遺跡　18．浦江遺跡　19．都地遺跡　20．吉武遺跡群
21．羽根戸原Ｃ遺跡　22．戸切遺跡　23．野方中原遺跡　24．橋本一丁田遺跡

第１図　四箇古川遺跡と周辺の主な遺跡（1/50000）



第２図　調査地点と周辺の調査区（1/4000）

第３図　調査区位置図（1/1000）

第 4 図　第 3 次調査区全体図 (1/200)

第２章　第３次調査の記録

１．調査概要

四箇古川遺跡群第３次調査地点は早良平野の南部に位置する。周辺の現況は住宅地から離れた水田地帯である。遺構検出面は現地表面下－ 30cm ~ 80cm、挙大～人頭大の円礫を多く含むシルト～砂礫層で南側ほど深い。遺構面自体は北に向かって標高を下げる。調査区は里道・水田の畦畔によって３箇所に分かれているが、ここでは南北２地点に分け、北から１区、２区と呼称する。

今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物２棟・竪穴住居跡１軒・溝１ないし２条・土壙３基・ピット多数である。

出土遺物は溝から弥生土器が、浅い凹み状の土壙SK01・SX145から縄文土器が出土した。遺物の総量はコンテナケースで７箱分である。

今回の調査では、縄文時代から弥生時代にかけての遺構を検出した。縄文時代の遺構は北側の1区で検出した浅い凹み状の土壙で、遺物からは晩期の遺構と推測される。弥生時代の遺構は南調査区で検出された溝と掃壁工事部分で検出された竪穴住居である。掘立柱建物は遺物僅少で時期は不明だが、形態からみて弥生時代の所産とみられる。何れも時期は前期後半～末頃とみられ、住居址は時期の特定できる遺物は出土しなかったが、特徴的な中央土壙とそれに付随するピットからいわゆる松菊里型の竪穴住居とみられる。遺跡群の中心は調査地の南～南西側で、弥生前期の集落が広がる可能性が指摘される。

２．１区の調査

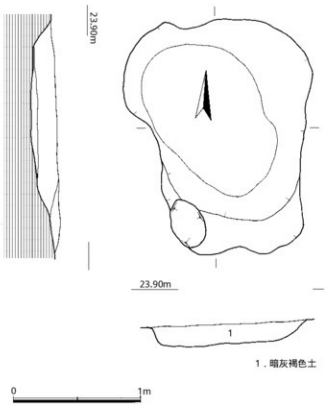
①土壙（SK）

SK01（第６図）

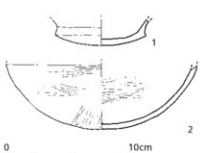
調査区南部にて検出した不整形の土壙である。くぼみ状であり、当初遺構と認定することを逡巡したが、底面が遺構面のシルト層を貫通しその下層の砂礫層に達していることから人為的な掘り込みとしたものである。

長軸は概ね南東～北西方向にもち、強いて言えば方形に近い平面プランを有する。長軸長1.9m、短軸長1.3mを測る。断面の形状は強いて言えば不整な逆台形だが、深さは15～20cmを測り浅く、皿状の断面形となる。土層断面図を第6図に示す。その埋土は現場で見る限りは土層断面からは複数の層序は認められず、粘性のある暗灰褐色シルト質土１層で構成される。炭化物粒が少量混じるがほぼ均一な堆積で、遺構壁面との境界は漸移的である。よってこの埋土は自然堆積と考えられる。

第５図　１区南壁土層断面実測図（1/60）



第６図　SK01実測図（1/30）



第７図　SK01出土縄文土器実測図（1/3）

出土遺物（第７図）

いずれも縄文土器である。１は精製浅鉢とみられる。底部の1/3を残す小片で、底径7.2cmに復元される小形品である。器壁はうすく焼成は良好で、内外両面とも密なミガキによって仕上げられる。外面底部端付近の一部に炭化物とみられる付着物が観察されるが、肉眼観察のため鉄分の可能性も残される。胎土は精良でこまかい雲母片が含まれる。２は精製の碗形土器である。体部の小片で、口縁と底部を欠く。胴部径15.0cmに復元されるが、小片のため不正確である。本来赤褐色を呈する器壁はうすく焼成は良好で、内外両面とも密なミガキによって光沢ある黒色に仕上げられる。外面底部端付近の一部に炭化物とみられる付着物が観察されるが、肉眼観察のため鉄分の可能性も残される。胎土は精良でこまかい雲母片が含まれる。

SK02（第８図）

調査区南部で検出した。西壁に接しており、遺構の西部は調査区外に伸びる。平面形は、遺構の西端が不明ながら概ね方形を呈するとみられ、４辺は東西南北の方向に向くかたちである。南北方向2.1m、東西方向1.3m以上を測る。東側の隅角部にはそれぞれピットが１基配される。当初切り合いの可能性を考え精査したが切り合いは確認できず、この土壌に付随するピットと現場では判断した。調査区西壁に接する部分にも１基ピットを検出している。これも同様の理由からこの土壌に付随するピットと考えられるため、遺構の西壁はさほど遠くない地点で止まると推測される。東側同様隅角部にはピットが設けられているものとみられる。ピットはいずれも不整円形で断面形は逆台形、深さ40cm前後を測る。

断面形は逆台形というよりむしろ皿状で、はっきりした角度をもって落ちるわけではない。底面までの深さは35～40cmを測る。土層断面図を第８図に示す。埋土は灰褐色シルト質土で、SK01と異なり炭化物を含まず粘性はない。ただし遺構面の黄褐色シルトとは色調が異なり、区別できる。堆積はほぼ均一で壁面との境界は漸移的であり、埋土は自然堆積である。

遺物は出土しなかった。よって時期は不明だが、後に述べる弥生時代の遺構の埋土とも明らかに異なり、おそらく中世以降の所産であろう。

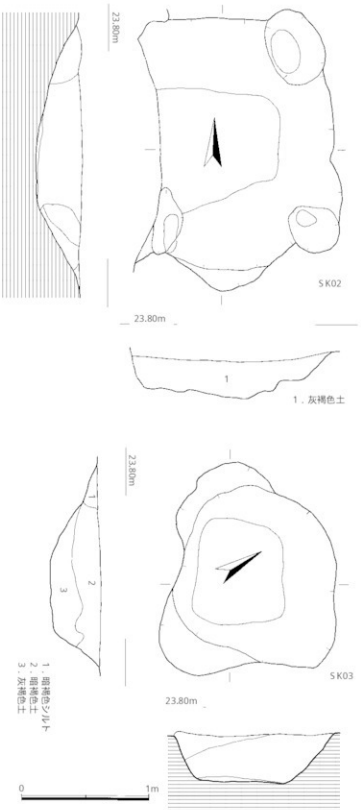
SK03（第８図）

調査区南部、SK02の東に隣接する形で検出した。平面形が不整で遺物も出土しなかったことから当初現場では遺構ではない可能性を考えたが、底面が遺構面のシルト層を貫通しその下層の砂礫層に達していることから人為的な掘り込みとしたものである。長軸を概ね南北方向に持つ。平面形は強いて言えば不整な楕円形を呈し、長径1.6m、短径1.3mを測る。南北方向に２箇所浅い段がつく。遺構の壁面の角度が中途で屈折するような状態であり、いわゆるテラスというほどの状態ではない。断面形は概ね逆台形状を呈し、壁面は急な角度をもって掘り込まれる。深さは40cm前後を測り、底面は遺構検出面の黄褐色シルト層を貫通して下層の暗灰色砂礫層に達している状況である。土層断面図を第８図に示す。埋土は暗褐色～灰褐色シルト質土で、３層に区分できたが、第１層以外は境界は漸移的で不明瞭である。いずれも現場での観察では自然堆積層と推測され、人為的に埋められた状況ではないとみられる。

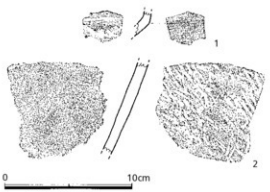
遺物は出土しなかった。よって時期は不明だが、後に述べる弥生時代の遺構の埋土とも明らかに異なり、おそらく中世以降の所産であろう。

②ピット出土の遺物

１区で検出されたピットの一部から縄文土器片が出土した。しかしいずれのピットも浅く平面形は不整で、出土した土器片も磨滅しており、これらピットの大半は木根痕跡等、遺構ではないと推測される。



第８図　１区SK02・03実測図（1/30）



第９図　1区ピット出土土器実測図（1/3）

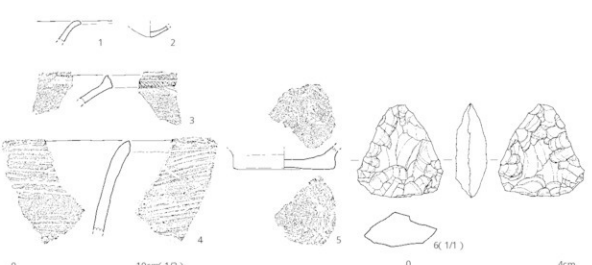
（第9図）何れも縄文土器である。１は浅鉢である。胴部の小片で、残存高2.0cmを測る。器壁はナデにて仕上げられ、平滑である。胎土は精良で、雲母の細片を含む。SP14出土。２は深鉢である。胴部の小片で、残存高7.1cmを測る。胎土はやや砂粒が多い。器壁外面は粗くなでつけられ、内面には炭化物が薄く付着する。SP22出土。

何れの個体も焼成は良好である。

③遺構検出面出土の遺物

表土掘削時および遺構検出時に、遺構検出面の黄褐色シルト質土層上面にて遺物を採集した。図示しうるものについて第10図に示す。

（第10図）1・2は土師器である。１は碗ないし坏である。口縁部の小片で、口径は復元できなかった。口唇部は外反する。残存高1.8cmを測る。２は底部である。小片のため器種は不明だが、ミニチュア土器の可能性を考えたい。残存高1.0cmを測り、底面は尖り底となる。器壁は薄く胎土は精良で、つくりがよい。何れの個体も焼成は良好である。3～5は縄文土器である。３は浅鉢である。口縁部の小片で、残存高2.8cmを測る。口唇部外面に２条の沈線と磨消縄文が観察され、後期三万田式土器と考えられる。器壁は内外両面とも密なナデにて仕上げられ、平滑である。胎土は精良で、雲母の細片を含む。４は深鉢である。口縁部の小片で、胴部から口唇部にかけてゆるやかに外反する。残存高7.2cmを測る。胎土はやや砂粒が多い。器壁は内外両面とも条痕文が観察される。炭化物等の付着はみられない。５は鉢形土器である。底部の小片で、残存高1.8cmを測り、底径8.0cmに復元される。胎土は精良で、焼成は良好である。６は石鏃未製品である。完形で出土した。石材は漆黒色の黒曜石を使用する。器長2.5cm、幅2.3cm、重量3.93ｇを測る。縁辺部に剥離を加え、鏃の形状に成形中の個体と推測される。



第10図　遺構検出面出土遺物実測図（1/3、6のみ1/1）

２．２区の調査

2区は１区と水田の畦畔を挟んで南側に位置する。里道でさらに東西に分割され、実質２地点の状況である。遺構検出面は１区の場合と異なり、水田耕作土および床土の下に暗褐色シルト質土層およびそれを切る旧河川がある。後述する弥生時代の遺構の埋土は床土下の暗褐色シルト層に酷似し、区分は困難である。遺構面はこのシルト層の上面である可能性があるが、そこで遺構を検出することはほとんど不可能であったため、やむをえずその下層の黄褐色シルト層まで掘り下げ、その上面を遺構検出面とした。南端部でのそれは黄褐色礫混じりシルト質土層で明瞭に遺構が検出されるが、他の部分は灰色砂礫層で、遺構ははっきりしなくなる。第５図の全体図ではピット等を図示しているがそれらの大半は木根痕跡等、遺構ではないものと推測される。主な遺構および縄文土器出土地点は以下の通りである。

① 掘立柱建物跡（SB）

SB102（第12図）

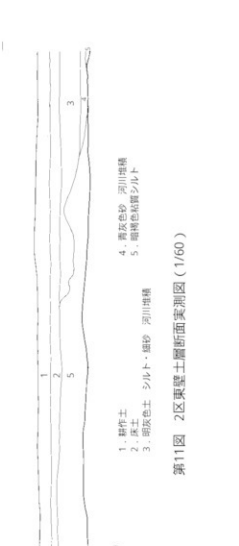
調査区南端部にて検出した。南北方向の柱穴２基の規模が大きくかつ類似していたため、調査区西壁にかかる１基を含め掘立柱建物とした。南北方向にはほかに柱筋が通り、かつ規模の類似したものがなく、ここでは暫定的に南北１間、東西１間以上の建物と報告する。柱穴の平面形は概ね東方向にテラスを持ち不整だが、その部分を除けば概ね円形といえる。柱痕跡が検出されなかったことからおそらくこのテラスは柱の抜き跡で、東方向に柱を抜いたと推測されることからみてこの柱穴列が建物の東端であったと思われる。深さ35～50cmを測る。柱穴の中心同士を結ぶと南北方向で３m、東西方向で２m以上を測る。柱穴の埋土は暗褐色シルト質土で、ほぼ均一な堆積状況で現場では分層できなかった。

遺物は弥生土器の細片が出土した。

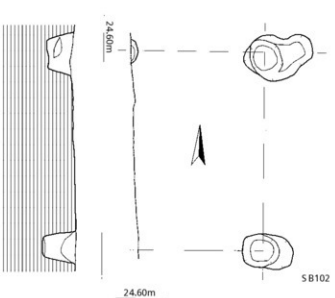
SB103（第12図）

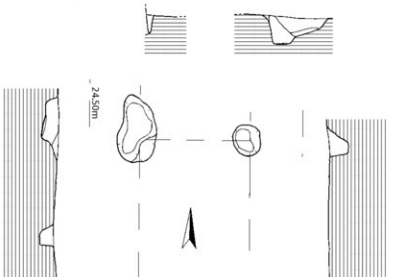
調査区南端部、SB102の北に隣接する形で検出した。南北方向に長軸をもつ。調査区が南北に狭長なためこの建物は東西方向に伸びる可能性がある。よって南北１間、東西１間以上の掘立柱建物である。柱穴の平面形は東側の２基はほぼ円形、南西隅は隅丸方形、北西側は柱を抜いたためか不整形である。柱穴の中心同士を結ぶと南北方向で３m、東西方向で1.8mを測る。深さは20～30cmを測り、柱痕跡は検出できなかった。柱穴の埋土は遺構検出面の黄褐色シルトをブロック状に含む暗褐色シルト質土で、ほぼ均一な堆積状況で現場では分層できなかった。

出土遺物の中で図示しうるものを第13図に示す。

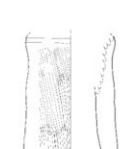


第11図　２区東壁土層断面実測図（1/60）





第12図　SB102・103実測図（1/60）



第13図　SB103出土土器実測図（1/3）

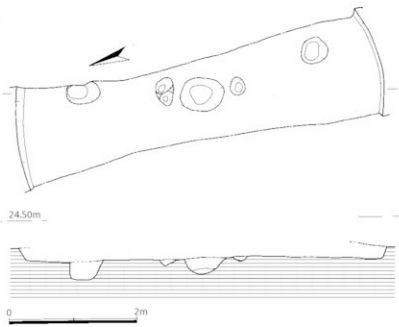
出土遺物（第13図）

1は弥生土器器台である。小片で残存高10.1cmを測る。器壁半ばで剥離した個体で、厚さは不明。外面はユビ押さえの成形痕が明瞭に認められ、粗いハケにて仕上げられる。胎土は精良で焼成は良好である。

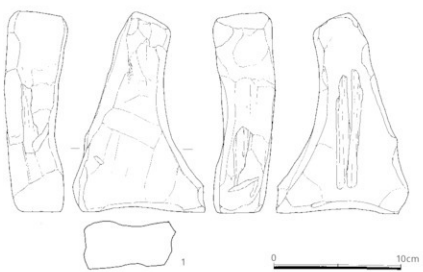
②竪穴住居（SC）

SC301（第14図）

里道により分割された西側調査区にて検出した円形の住居址である。周壁は深さ20cm程度の残存で、壁溝は認められない。埋土は暗褐色粘質シルト質土で、ほぼ均一な堆積状況で現場では分層できなかった。大きく削平されている状況であるが、中央の土壙を中心に周壁端部同士を結ぶと径約5.8mの規模に復元できる。中央土壙は両脇にピットを有する状況で、いわゆる松菊里型の竪穴住居である。主柱穴は中央土壙両脇のそれを除いた2基とみられる。住居址の大半が調査区外となるため主柱の配置は不明である。平面形は概ね円形を呈し、長径40～60cm、深さ30～40cmを測る。埋土は住居址堀方の埋土と区分は困難で、柱痕跡は検出できなかった。中央土壙は長径70cmの楕円形を呈し、深さ35cmを測る。埋土は暗褐色シルト質土で、住居址のそれと区分は困難である。炭化物片・焼土粒が少量出土した。壁面の被熱は認められない。両脇の小ピットは長径30～40cmを測る不整な楕円形で、深さ15～20cmと浅い。床面はほぼフラットで、貼り床は検出できず、床面の硬化も確認できなかった。



第14図　SC301実測図（1/60）



第15図　SC301出土遺物実測図（1/3）

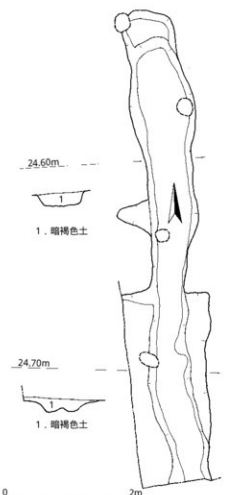
出土遺物（第15図）

1は砥石である。床面直上から出土した。ややきめの粗い砂岩質の石材を用い、6面全て使用しており、2条の凹線が観察される。長軸長15.8cm、短軸長10.4cm、厚さ3.8cm、重量659gを測る。

③溝（SD）

SD101（第16図）

調査区南端にて検出した。南北方向に伸びる溝で、延長7.4mを確認できた。幅は南側が広く張り出すが、張り出し部は浅く約5cm程度で幅は北側と概ね等しくなる。深さは20cm前後を測る。平面形は不整で直線的とまではいえない。埋土は暗褐色シルト質土で、ほぼ均一な堆積状況で現場では分層できなかった。



第16図　SD101実測図（1/60）

出土遺物（第17図）

全て弥生土器である。1～3、4は甕である。1は口縁部の小片で、残存高3.6cmを測る。2・3は底部の小片である。2は底径6.0cmに復元され、外面には粗い八ケが観察される。3は底径6.6cmに復元される。4は壺である。底部から胴部下半にかけての小片で、残存高5.3cmを測り、底径8.0cmに復元される。5は口縁部から胴部上半にかけての小片である。残存高9.6cmを測り、口径20.0cmに復元される。胴部外面には縦方向の八ケが残る。

何れの個体も胎土は精良で、焼成は良好である。

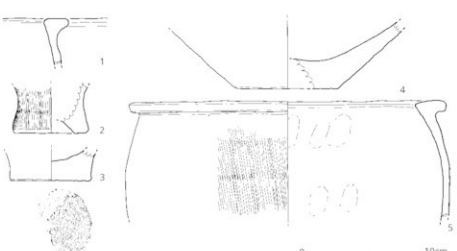
④性格不明の遺構（SX）

SX145（第18図）

調査区北部にて検出した。　東西方向に長軸をもつ浅い溜まり状の遺構で、風倒木痕の可能性もあるがここでは暫定的に遺構として報告する。南北1.8m、東西3m以上を測り、深さは5～10cm程度で浅く、遺構ではない可能性がある。埋土は暗褐色シルト質土の単層で、壁面との境界ははっきりしない。

出土遺物（第20図）

1は土師器甕である。口縁部の小片。弥生時代以降の遺物はこれ1点のみで、混入とみられる。2以下は縄文土器。2は浅鉢。口縁部の小片である。以下は粗製深鉢である。3～5は口縁部の小片。何れも外面に条痕文を有する。6・7は胴部の小片である。8・9は底部の小片である。8は底径7.2cm、9は7.8cmに復元される。10～13は口縁部の小片。11は口縁部と胴部の間につよい屈曲がある。12は外面

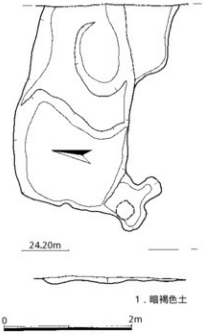


第17図　SD101出土遺物実測図（1/3）

に条痕文を有する。14～17は胴部の小片である。14～16は胴部半ばにくの字型の屈曲を有する。

④遺構検出面出土の遺物

（第19図）何れも弥生土器。１は甕である。高脚状の底部を有し、残存高14.7cmを測り、底径6.6cmに復元される。２は器台である。上部の小片で、残存高9.0cmを測り、口径7.3cmに復元される。３は甕である。底部の小片で、底径5.6cmに復元される。

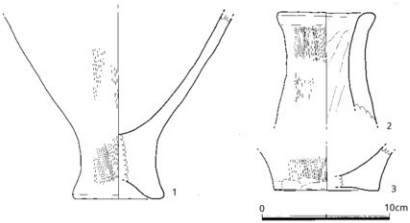


第18図　SX145実測図（1/60）

３．小結

今回の調査では、弥生時代の集落とともに縄文時代後・晩期の遺構・遺物が検出された。以下、簡単にではあるが所見を記したい。

縄文時代の遺構は、１区検出のSK01、2区検出のSX145である。いずれも不整形で浅く、遺構かどうか判別に迷う位のものである。出土遺物は何れも磨滅し、出土状況は２次的な状況を示す。投げ込まれる等の状況は窺えない。遺物は小片が大半で時期の判定が難しいが、縄文晩期黒川式ないし広田式となろうか。ただし１区において遺構検出面より口唇部に磨消縄文を有する浅鉢の口縁部小片が出土しており、この破片は後期三万田式と考えられる。周辺の調査例においても当該期の遺物が多数出土しており、したがって後期の遺物が含まれている可能性は高い。

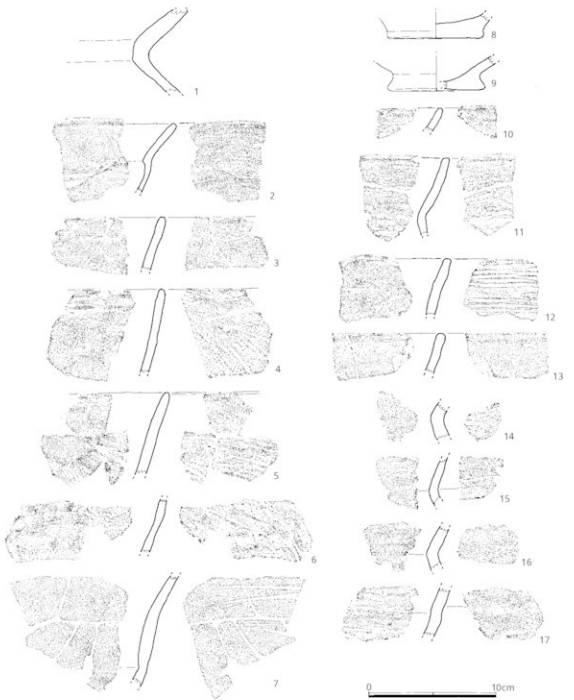


第19図　遺構検出面出土遺物実測図（1/3）

弥生時代の遺構は、掘立柱建物・竪穴住居・溝が検出された。掘立柱建物は調査区が狭長で全体を把握できないが、柱穴のならびから２間×２間を大きく越えるものではないと推測される。竪穴住居は円形プランで、これも調査区の関係で全体を把握できないが、特徴的な中央土壙とそれに付随するピットからいわゆる松菊里タイプの住居址と考えられる。溝は南北方向に伸びるもので、北端ははっきりと立ち上がる。水が流れた形跡は窺えず、何らかの区画溝の可能性がある。道路を挟んだ南側の第４次調査区では削平のためか続きが検出されず、性格は不明である。掘立柱建物SB102と切り合うためこれと同時に存在してはいない。

時期は出土遺物から弥生時代中期前半と考えられる。しかし遺物量が全体に少なく、とりわけ掘立柱建物および住居址からの出土がほとんどなく遺構同士の先後関係はよくわからない。

以上、今回の調査において検出した遺構・遺物について所見を述べてきた。調査地周辺では継続的に試掘を実施しているが、明確な遺構はなかなか検出できずにいる。今回の調査地から道路を挟んで



第20図　SX145出土土器実測図（1/3）

南では第４次調査を引き続いて実施したが、こちらでは明瞭な遺構自体が少ない状況である。このような状況から、遺跡が乗る扇状地全体に遺構が分布するわけではなく、ところどころ分布する微高地上にのみ小集落が形成されていたか、あるいは大きな集落が洪水等により削られ、島状に遺構が残される結果となったものと推測される。

1．1区南半全景（北より）

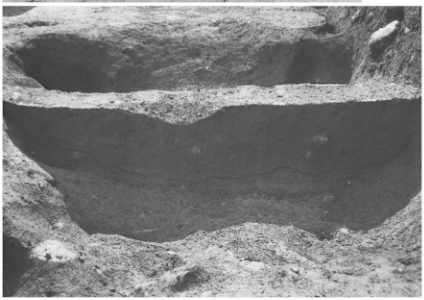
2．1区北半全景（南より）

3．1区東壁土層（西より）

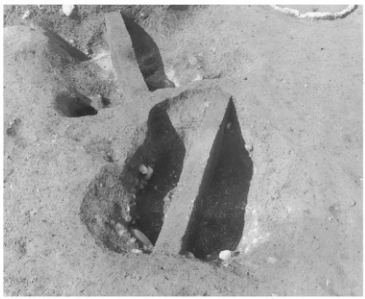
PL．2

1．SK01（北より）

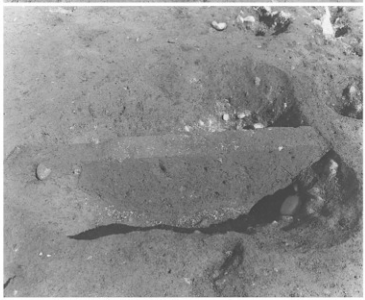
2．SK02（東より）



3．SK02土層（北より）



1．SK03（東より）



2．SK03土層（南より）

3．2区南半全景（南より）

PL．4

1．2区北半（拡張前）全景（南より）

2．2区北半（拡張部）全景（南より）

3．2区東壁土層（西より）

1．SB103（北より）

2．SB102・SD101（南より）

3．SD101土層（A-A′）（北より）

PL．6

1．SD101土層（B-B′）（北より）

2．2区西側調査区全景（南より）

3．SC301（南より）

第３章　第４次調査の記録

１．調査の概要

（１）調査の経過

第４次調査は2008年10月1日に器材の搬入を行い、調査を開始した。調査開始時点では２地点（Ａ区及びＢ区）の調査予定で、まず北側のＡ区から着手した。Ａ区は第３次調査の１区と２区に挟まれた地点で、廃土は両調査区に置くことができたため、一度に全面を調査した。Ａ区の調査は10月２日から始め、全景撮影を10月20日に行い、10月29日に終了した。Ａ区調査中の10月15日に事業対象地内の未試掘地点の試掘調査を行ったところ、遺構・遺物が確認されたため、これらの地点も調査対象とした。その結果調査対象地を現在の道・溝などを境に５つに分割し、北からＡ区～Ｅ区とした。Ａ区は調査終了後に工事業者に引き渡し、11月４日よりＣ区の調査に着手した。Ｃ区の廃土は西側の田圃に置くことができたため、一度に全面を調査した。12月２日にＣ区の掘削作業を終了し、12月３日からはＢ区の調査に移行した。Ｂ区の廃土は場内で処理することになっていたため、北側２／３の部分の表土剥ぎを行い、調査を開始した。12月12日にはラジコンヘリによりＢ区とＣ区の全景撮影を行い、12月22日からＣ区を埋め戻した。年が明けた１月５日からはＤ区の表土剥ぎを開始した。Ｄ区の廃土は東側と西側の田圃に置くことができたため、一度に全面を調査した。Ｄ区の掘削作業と並行して、１月14日から重機でＢ区の土砂反転を行い、以降はＢ区とＤ区の調査を同時並行で行った。１月29日からはＥ区の表土剥ぎも開始し、３地点の同時並行となった。２月６日にラジコンヘリでＢ区・Ｄ区・Ｅ区の全景撮影を行い、その後Ｂ区・Ｄ区の遺構実測やＥ区の掘削などを行った。掘削・実測終了後は残務処理及び遺物洗浄を行いつつ、２月13日から20日にＢ区及びＤ区を、３月９日にＥ区の埋め戻しを行った。３月10日にユニットハウスの撤去を行い、調査を完全に終了した。

（２）調査の方法と各区の概要

第４次調査対象地は四箇古川遺跡の中心を南北に縦断する。調査対象面積はおよそ2800㎡であったが、作業における安全確保のために引きを取るなどした分、調査面積は狭くなった。実際の調査面積はおよそ2200㎡である。先述したように調査対象地は北からＡ区～Ｅ区と５分割した。調査の際は、調査区毎に任意のＸ、Ｙ座標を設定した。各調査区の土層図には任意の座標による位置を示している。遺構番号については通し番号とし、Ａ区：01～、Ｂ区：101～、Ｃ区：201～、Ｄ区：301～、Ｅ区：501～とした。

今回の調査は、長さ250mにも及ぶトレンチ状の調査であったので、調査区毎に様相が大きく異なる。各調査区の内容を大まかに述べると、Ａ区では縄文時代晩期の埋甕の他、縄文時代後期～弥生時代の遺物が中心に出土している。Ｂ区は黄褐色シルトの微高地で、弥生時代前期～中期頃と中世の集落が存在する。Ｃ区・Ｄ区は中世の集落と河川の跡で、土師器・陶磁器などが出土している。Ｅ区は調査区の大半が河川である。

出土遺物は総量でコンテナケース約３０箱分である。なお、各調査区で出土した石器については第７節にまとめて報告する。

２．Ａ区の調査

（１）調査の概要

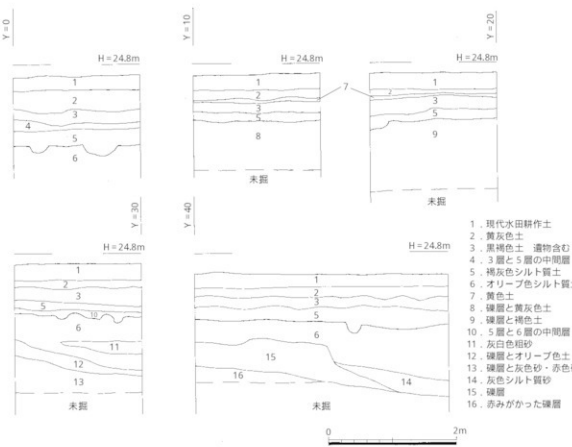
Ａ区は第３次調査の１区と２区に挟まれた地点で、従来の遺跡分布図では四箇古川遺跡の最北端にあたる。調査対象面積は約400㎡。実際の調査区は長さ約50m、幅６m前後の狭長な範囲となった。調査区の中心付近を縦断するラインをＸ＝０、調査区北端から４mほどの杭をＹ＝０として任意に座標を設定した。第21図はＡ区の東壁土層図である。調査前の標高はおよそ24.6mで、現代水田耕作土の下には黄灰色土、遺物包含層である黒褐色土が見られ、地表面から70～80cmで検出した灰オリーブ色シルトと礫層を検出面とした。検出面の標高は調査区中央付近で約23.8m。検出面は北と南にそれぞれ緩やかに傾斜しており、調査区北端で23.5m、南端では23.6mである。調査終了後に人力で礫層を１m近く掘り下げたが、下面を確認することはできなかった。礫層は流水の影響と思われる起伏があり、礫層が低くなる部分に灰オリーブ色シルトが堆積していた。

検出した遺構は縄文時代晩期の埋甕１基、土坑、ピット、包含層である。全体的に遺構密度はうすく、土坑としたものも掘り込みが不明瞭な窪み状のものがほとんどである。縄文時代後期～晩期の土器、弥生土器、須恵器、黒曜石製剥片石器などが出土した。

（２）遺構と遺物

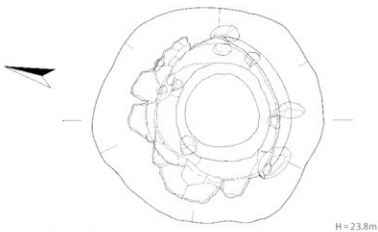
①埋甕（第23図、巻頭図版４、PL.８）

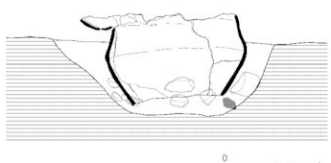
調査区北端から約10m地点の東壁際で、遺構検出中に輪切り状に見える土器を確認して埋甕の存在

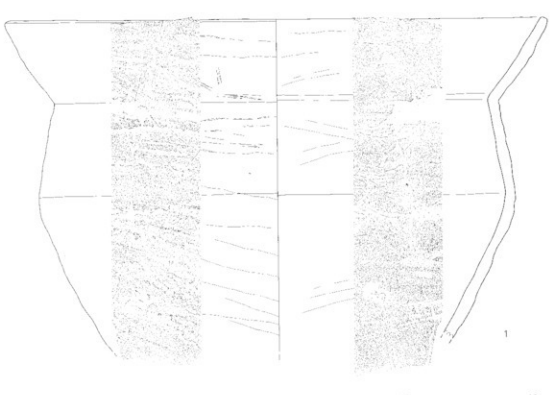


第21図　Ａ区東壁土層図（1/60）

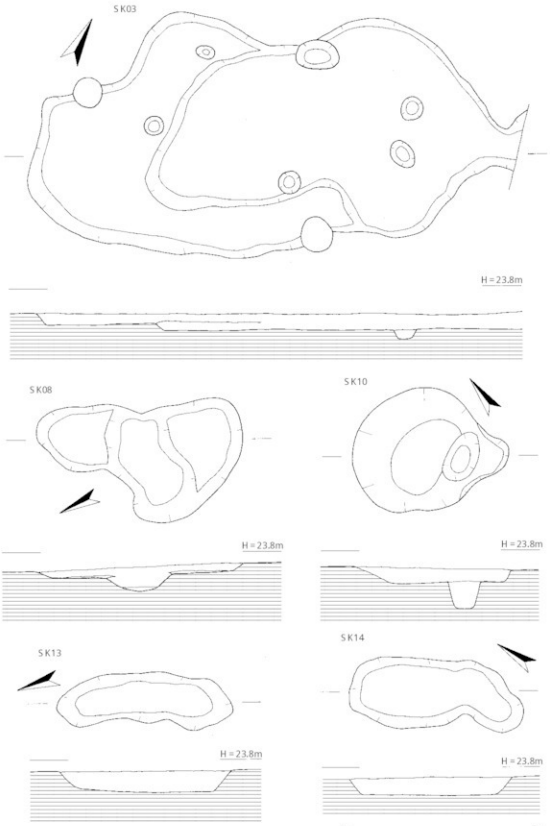
第22図　A区全体図（1/200）



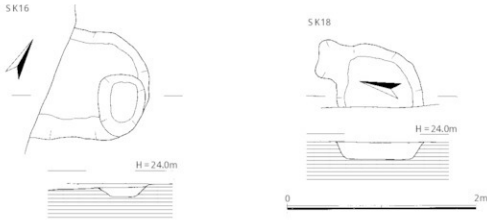




第23図　埋甕出土状況実測図及び埋甕実測図（1/10、1/3）



第24図　SK03・08・10・13・14実測図（1/40）



第25図　SK16・18実測図（1/40）

に気付いた。当初掘方が識別できず、一段下げを行い何度か精査してようやく輪郭を把握した。地山と覆土の区別は困難で、掘方・上端・下端は心許ないところがある。北側は口縁部が残っているが、南側では欠失している。表土剥ぎの際に削り取ってしまった可能性もある。口縁部が検出面の高さ付近であることから、実際は数十センチ上面から掘り込まれたものと思われるが、上層の黒褐色土から掘り込まれたのか、あるいは削平された後に黒褐色土が堆積したのかは不明である。この埋甕は深鉢を正置したもので底部を欠き、胴部下位周辺には5cm～拳大の石がいくつか見られた。埋甕を据える際に使用したものと思われる。

埋甕は粗製の深鉢で、復元口径42.6cm、胴部最大径37.6cm、残存器高26.2cmである。口縁部がわずかしか残っていないため、直線的な口縁か波状気味の口縁か判断し難い。胴部外面は板状工具で斜め方向に粗くナデ調整され、頸部と胴屈曲部との間は幅3cmほどケズリ状になっている。内面は横方向にミガキ状の粗い調整が施されている。縄文時代晩期前半の古閑式に相当するであろうか。

②土坑（SK）

SK03（第24図、PL.9－1）

調査区北端から5m地点で検出した。プラン、掘り込みとも不明瞭であった。残存長5.0m、短軸2.5m。深さは10～20cmで遺存状況は悪い。出土遺物は少なく小片ばかりであるが、縄文土器が出土している。その他に黒曜石製剥片石器も出土した。

出土遺物（第26図）

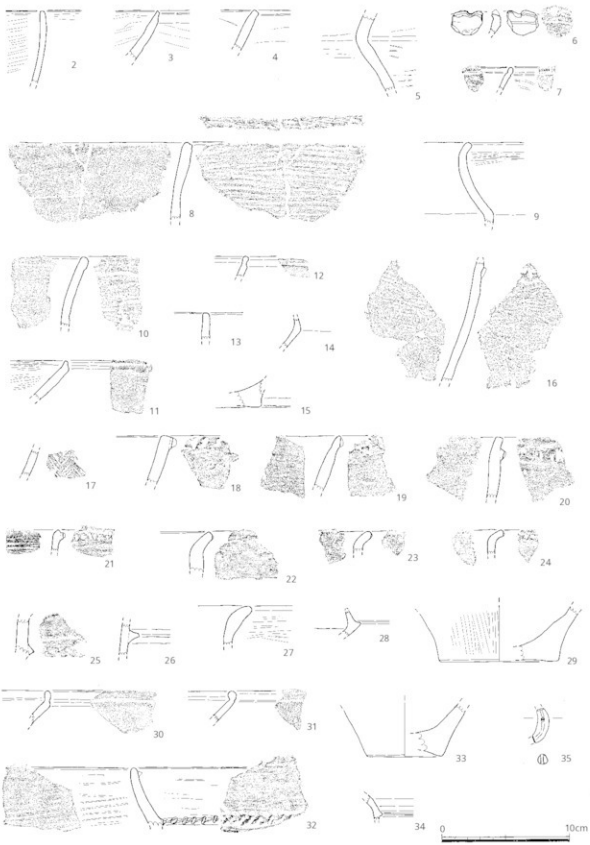
2は縄文時代晩期の深鉢である。口縁は直立気味で、内外面に横方向の研磨が施されている。3は鉢の口縁部で、外面には板状工具による斜め方向の擦過痕が残り、内面は粗いミガキ状になっている。4も鉢の口縁部で、内外面にヨコナデを施す。5は土師器の甕の頸部である。SK03の時期を示すものかは不明である。

SK08（第24図）

SK03の南西に位置する。長軸2.2m、短軸1.2mの不整形な土坑で、深さは25cmを測る。遺物はいずれも小片であるが、縄文土器が出土している。その他に黒曜石製剥片石器も出土した。

出土遺物（第26図）

6は鉢の口縁部である。波状の口縁の頂部には刻みが施され、外面には横方向の沈線が一条見られる。縄文時代後期の西平式にあたるであろうか。7は縄文時代晩期の浅鉢口縁部である。丸みをもっ



第26図　A区出土遺物実測図（1/3）

た口縁の内外に沈線がめぐる。

SK10（第24図、PL.9－2）

SK03の南に位置する、長軸1.6m、短軸1.3mの円形土坑である。出土遺物は土器少量で、図示したもの以外はいずれも小片であった。

出土遺物（第26図）

8は縄文時代後・晩期の粗製深鉢である。外面には横方向の貝殻条痕が残り、内面はヨコナデ調整である。口縁部上面にも施文している。

SK13（第24図）

SK08の南に位置する、長軸1.9m、短軸0.5mの土坑である。深さは25cm。土器少量が出土したのみである。いずれも小片であった。

SK14（第24図）

SK13の南東に位置する、長軸1.7m、短軸0.75mの土坑である、深さは20cm。土器少量が出土したのみである。ハケメを有する土器片が見られた。

SK16（第25図）

調査区北端から約20mの西壁沿いで検出した。残存長1.2m、短軸1.1m。深さ15cmの窪み状のものである。土器少量が出土したのみで、いずれも小片であった。

SK18（第25図）

調査区中央付近の西壁沿いに位置する。残存長0.7m、幅0.9mの土坑で、深さは15cm。土器少量が出土したのみである。いずれも小片であった。

③その他の出土遺物（第26図）

9はSP17から出土した壺である。頸部は内傾し、口縁部がわずかに外側に開く。外面には丹塗りを施し、口縁下にはミガキの痕跡が残る。10～16は調査区北端からY＝－6付近に残った、検出面上層の包含層から出土した遺物である。10は縄文時代後・晩期の粗製の深鉢である。口縁部は外側にひらく。内面は丁寧にナデているが、外面の調整は粗い。11は縄文時代晩期の浅鉢で、内外面とも研磨を施す。12も晩期の浅鉢で、口縁部外面にはやや幅広の沈線がめぐる。13は深鉢の口縁部、14は浅鉢の屈曲部である。ともに小片のため傾きが不正確である。15は弥生土器の甕底部である。16は刻目突帯文土器の深鉢である。突帯は口縁端部からやや下がったところにあり、ヘラ状工具で刻みを施す。内外面とも横方向の条痕が残る。17～29は調査区南端からY＝－36付近の包含層出土遺物である。17は胴部小片で、沈線文を有する。曽畑式土器の胴部を想定したが、弥生時代前期壺の無軸羽状文の可能性もある。18～21は刻目突帯文土器の深鉢である。ヘラ状工具による小さな刻目のものが多い。22～24は弥生時代前期の甕である。いずれも口縁端部の下端に小さな刻目を施している。25は屈曲甕の胴部であろうか。26は刻目のない胴部突帯である。27は弥生時代前期の壺口縁部である。外面にはミガキの痕跡が残る。28は6世紀末頃の須恵器坏身である。29は弥生時代中期の甕底部である。外面には縦方向のハケメが残る。30～35は検出時及び清掃時に出土した遺物である。30・31は縄文時代晩期の浅鉢で、ともに口縁部外面には沈線がめぐる。32は刻目突帯文土器の屈曲甕である。口縁部の突帯は剥落しているが、口縁部・屈曲部ともに突帯をめぐらすタイプである。外面は丁寧なナデ、内面は条痕調整の後にナデている。33は弥生時代中期の甕底部である。やや上げ底になっている。34は古墳時代後期の須恵器坏蓋である。35は土製勾玉である。径2mmの穿孔を施す。

３．Ｂ区の調査

（１）調査の概要

Ｂ区は、第３次調査２区の南側、第４次調査Ｃ区の北側の地点である。調査対象面積は約700㎡で、実際の調査区は長さ約50m、幅およそ11mの長方形の範囲となった。まず北側から２／３の調査を行い、その後土砂を反転して残りの部分の調査を行った。調査区の中心付近を縦断するラインをＹ＝０、調査区北端から５mほどの杭をＸ＝０として任意に座標を設定した。第27図はＢ区の西壁土層図である。調査前の標高はおよそ25.4mで、現代水田耕作土の下は灰黄色土、黒褐色土、地山の黄褐色シルトとなる。検出面にはゆるやかな起伏があり、北端の標高は24.6m、調査区中央付近は25.0m、南端は24.8mである。Ｂ区とＣ区の境には流路状の落ちがあり、集落域である微高地と河川堆積の低地とを区切っている。調査終了後に黄褐色シルト下面までトレンチ掘削を行った結果、検出面からおよそ30cmで礫層となり、礫層の厚さは120cm以上であった。

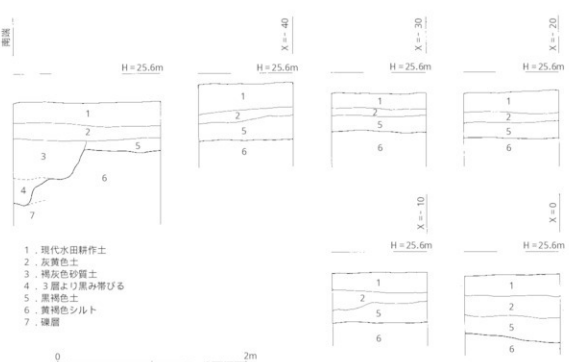
検出した遺構は弥生時代の竪穴住居、中世の溝、ピットなどである。ピットは多数検出したが、建物としてまとめることができなかった。遺構の覆土には黒褐色のものと灰色のものとがある。出土遺物が非常に少ないため時期を決定し難いが、概ね黒褐色のものは弥生時代、灰色のものは中世と考えている。出土遺物は弥生時代土器と中世土器が主体で、その他に縄文時代前期・晩期の土器が少量出土している。

（２）遺構と遺物

①竪穴住居址（ＳＣ）

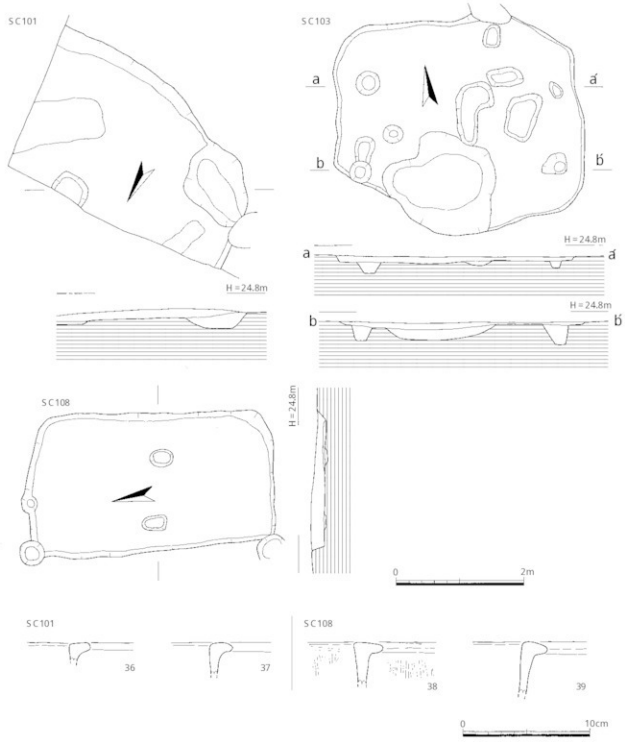
ＳＣ101（第29図）

調査区北東隅で検出した、残存長2.5～3.0mの円形のプランである。調査区外に広がるため平面形は



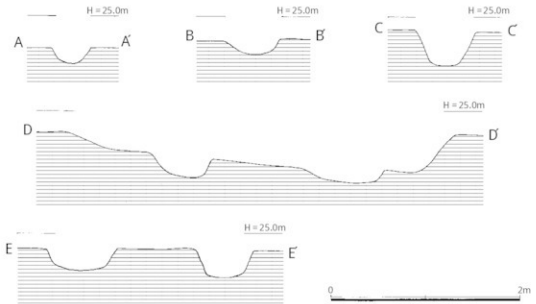
第27図　Ｂ区西壁土層図（1/40）

第28図　B区全体図（1/200）

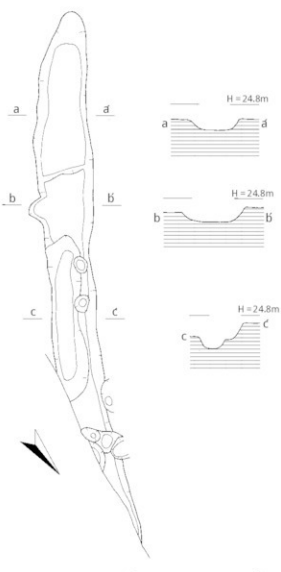


第29図　SC101・103・108実測図及び出土遺物実測図（1/60、1/3）

不確実である。覆土はしまりのある黒褐色土で、検出時はしっかりした遺構と思われたが、掘削を始めてみると壁面・床面ともに不明瞭であった。北側の第３次調査南区では円形の松菊里型住居が確認されていることから、このSC101も不確実ながら住居址とした。遺物は非常に少ないが、弥生時代中期の土器が少量出土している。



第30図　SD128・151断面図（1/40）



第31図　SD155実測図（1/60）

出土遺物（第29図）

36・37はともに弥生中期の甕口縁部である。ともに小片のため傾きに若干不安が残る。断面は逆L字形で、口縁端部は短い。摩滅が著しく調整不明瞭である。

SC103（第29図、PL.11－１）

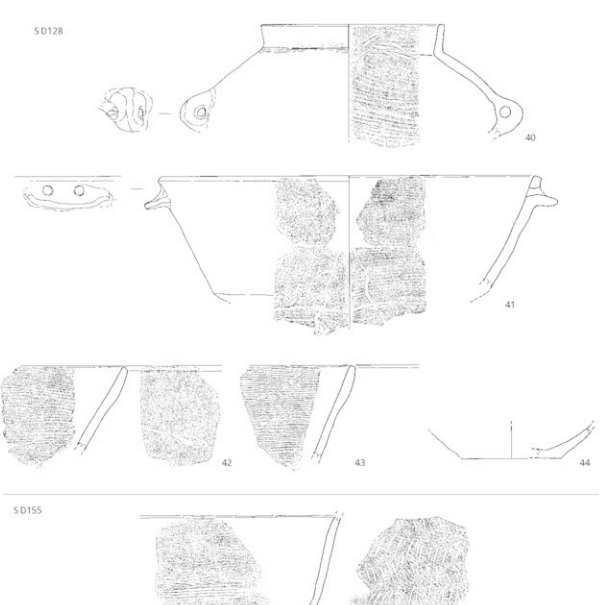
調査区北端から５m付近で検出した、長軸3.9m、短軸3.4mのやや膨らみ気味の長方形プランである。覆土は黒褐色土である。遺存状況は非常に悪く、床面までは５～10cm程度であった。南壁中央付近は撹乱により破壊されており、礫が埋まっていた。遺物が非常に少ないため、時期ははっきりしない。

SC108（第29図、PL.11－２）

SC103の東側で検出した、長軸3.9m、短軸2.3mの隅丸長方形のプランである。覆土は均質な黒褐色土で、深さは20cm前後である。床面中央には径40cmほどの浅い窪みが２つ並ぶ。出土遺物は非常に少なく、弥生時代中期の土器が少量出土している。

出土遺物（第29図）

38・39はともに弥生時代中期の甕口縁部である。断面逆L字状で、口縁端部は短い。38は内外面にタテハケが残る。

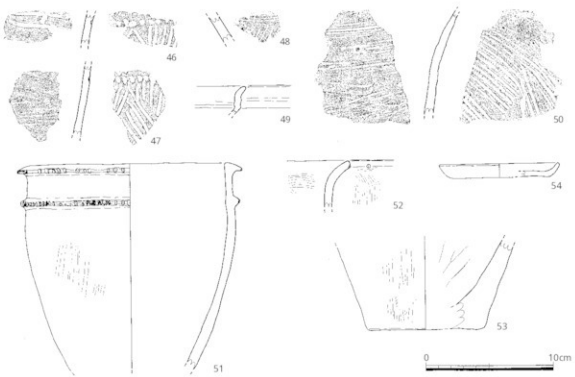


第32図　SD128・155出土遺物実測図（1/3）

②溝（SD）

SD128・151（第28図、第30図、PL.11－３）

B区の北から南まで延びる溝である。SC101の南から始まり、湾曲しながら南に延びていく。幅は40～80cm、深さは15～40cmである。南端から15mほどのところで長さ６m、幅４mほどの範囲の大きな落ち込みに繋がり、そこから先は幅70cm、深さ30cmほどの二本の溝に分かれて西壁に向かってカーブする。覆土はいずれも一様な灰色土である。出土遺物は少ないが、大きな落ち込みの部分から湯



第33図　SX158・ピット出土遺物実測図（1/3）

釜、鍋などが出土した。中世後半頃と思われる。

出土遺物（第32図）

40は土師質の湯釜である。口径14.4cm、残存器高9.0cm。口縁部は直立気味で、扁平な胴部の最大径部分に双耳がつけられている。胴部中位以下には煤が付着している。41は土師質の鍋である。口径30.2cm、残存器高9.9cm。口縁部には一対の把手が設けられ、把手部分には２つの穿孔が施されている。胴部外面は焼けて煤が付着し、内面には横方向のハケメが見られる。42・43は土師質の鍋の口縁部片である。ともに外面には煤が付着し、内面にはヨコハケが施されている。44は土師器坏の底部で、復元口径8.0cm、残存器高2.8cmである。内外面ともに浅黄橙色で、底部外面には回転糸切りの痕跡が残る。

SD155（第31図）

調査区南東端で検出した、残存長8.6m、幅0.9mほどの溝である。東側は調査区外に延びる。調査区南端の谷であるSX075が埋没した上を溝が走っているので中世以降の溝と思われるが、少量の遺物の中に縄文時代前期の土器が含まれていた。

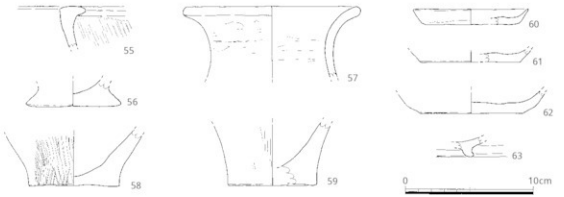
出土遺物（第32図）

45は縄文時代前期の曽畑式土器である。深鉢の胴部から底部にかけての部分と思われる。胎土に滑石は含んでいない。外面には羽状の細い沈線文が施されており、内面には横方向の貝殻条痕が残る。胴部外面上位には付着物が見られる。

③不明遺構（SX）

SX158

調査区南端で検出した地山の落ちである。C区北端のSX275と対応して浅い谷を形成している。図面上での幅はおよそ10m、確認できた深さはおよそ60cmである。白色・黒色の粗砂で埋まる。土師



第34図　その他の出土遺物実測図（1/3）

器・須恵器に混じって縄文時代前期の土器が出土した。

出土遺物（第33図）

46・47は縄文時代前期の曽畑式土器である。口縁部下～胴部にかけての部分と思われる。外面には等間隔に刺突文が並び、その下には幅３mmほどの縦、斜め方向の沈線文が施されている。胎土に滑石は含んでいない。

④ピット出土遺物（第33図）

48は弥生時代前期の壺の肩部である。横方向の沈線文と、羽状文が施されている。SP157からの出土。49は縄文時代晩期前半頃の浅鉢の口縁部で、屈曲部から外反して立ち上がる。SP131からの出土である。50は縄文時代後・晩期の粗製深鉢である。口縁部から胴部にかけての部分で、口縁部はゆるく外側に開いていく。外面には斜め方向の、内面には横方向の貝殻条痕が見られる。SP146からの出土。51は弥生時代前期末頃の甕である。復元口径17.6cm、残存器高16.4cmを測る。口縁部は断面逆L字形で、端部には刻目を施す。口縁下にも突帯を巡らせ、口縁端部同様に刻目を施している。胴部外面には縦方向のハケメがわずかに認められる。SP122からの出土である。52は弥生時代前期の甕で、口縁部は如意形に外反する。器壁の摩滅が著しいものの、口縁端部に刻目と思われる窪みがわずかに認められる。胴部外面はタテハケ、内面はヨコハケである。53は弥生土器の甕底部である。復元底径9.2cm、残存器高7.0cm。厚い平底で、外面にはタテハケが見られる。52・53はSP124からの出土である。54は土師器の小皿である。復元口径9.5cm、器高1.1cmを測る。摩滅が著しく、底部外面の切り離し痕跡は不明瞭である。SP117からの出土である。

⑤その他の出土遺物（第34図）

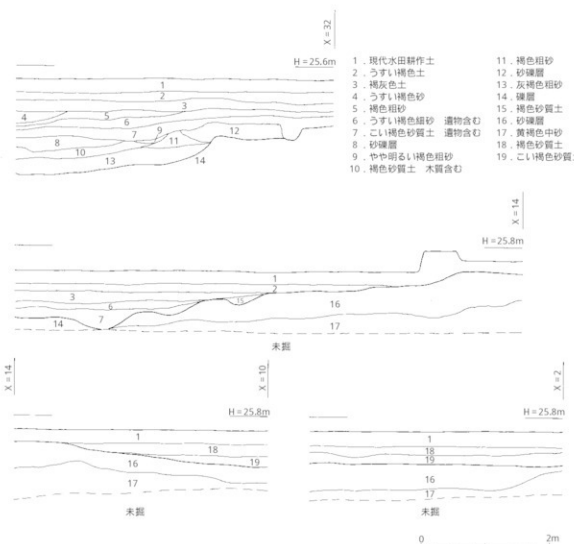
検出時に出土したものや、遺構から遊離したものを挙げる。55は弥生時代中期の甕口縁部である。外面にはタテハケが残る。56は夜臼式土器の底部と思われる。復元底径7.4cm、台形状を呈する。57は弥生時代前期の壺形土器の口縁部である。復元口径14.0cm、残存器高5.6cmを測る。色調は浅黄橙色で、胎土はやや粗い。口縁部内外面はヨコナデである。58は弥生時代中期の甕底部である。復元底径7.2cm、残存器高4.4cmを測る。平底で外面はタテハケ、内面はナデ調整である。59は弥生土器の甕底部である。復元底径7.0cm、残存器高5.1cmを測る。外面はタテハケのちナデ調整か。60は土師器の小皿である。復元口径7.8cm、器高1.2cmを測る。口縁部内外面は回転ナデ、底部外面には回転糸切りの痕跡が残る。61も土師器の小皿で、口縁部を欠く。復元底径8.0cm、残存器高1.0cmを測る。底部外面は回転糸切りの痕跡が残る。62は土師器の坏で、口縁部を欠く。復元底径8.0cm、残存器高1.8cmを測る。底部切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。63は瓦器椀の底部である。小片のため径は復元していない。

４．Ｃ区の調査

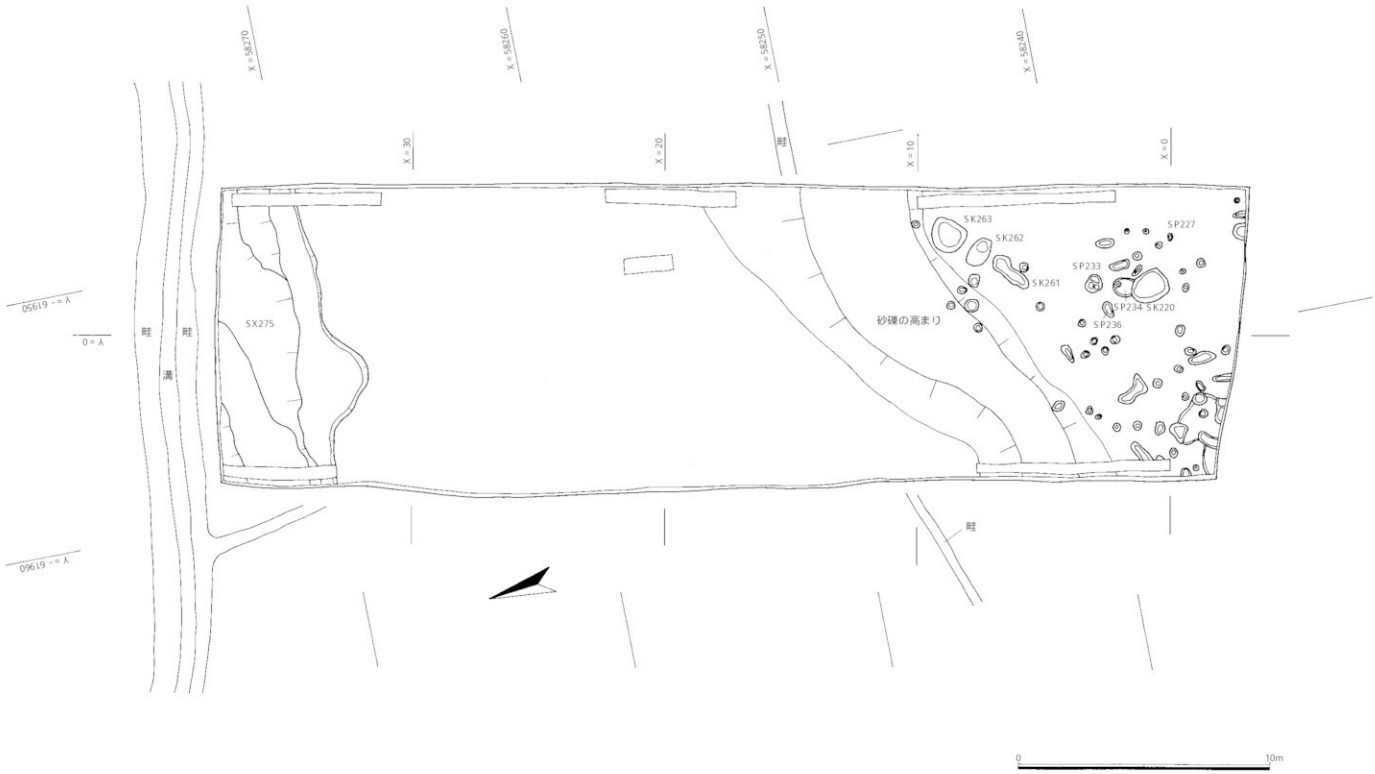
（１）調査の概要

Ｃ区は四箇古川遺跡の中心付近に位置する。調査対象面積は約520㎡で、実際の調査区は長さ約40m、幅およそ12mの長方形の範囲となった。調査区中心付近を縦断するラインをＹ＝０、調査区南端から３mほどの杭をＸ＝０として任意に座標を設定した。第35図はＣ区の東壁土層図である。調査前の標高は北半の水田で25.4m、南半の水田で25.6mであった。現代水田耕作土の下は２層：うすい褐色土、３層：褐灰色土、４層：うすい褐色砂、そして砂礫層となる。当初は３層を検出面と考えたが、遺構が確認できなかったため、砂礫層を検出面とした。３層・４層は遺物包含層で、中世遺物が中心であった。検出面の砂礫層の標高は北端で24.6m、南端で25.0mである。調査区の中央付近を砂礫層の高まりが北東から南西に横切り、その高まりを境に遺構の分布が異なる。高まりより南側は土坑・ピットが多く見られるのに対し、北側は調査区北端のSX275しか確認されなかった。調査終了後にトレンチを設定して重機で深掘りを行ったが、砂礫層の下面を確認することはできなかった。

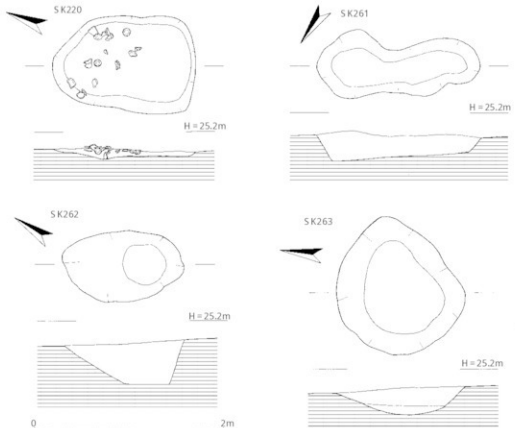
検出した遺構は中世の土坑、ピットなどである。SK220を除くと遺構出土の遺物は少ない。この調査区は全面が河川堆積で、堆積後に中世の集落として利用されたものと思われる。



第35図　Ｃ区東壁土層図（1/60）



第36図　C区全体図（1/150）



第37図　SK220・261・262・263実測図（1/40）

（２）遺構と遺物

①土坑（SK）

SK220（第37図、PL.12－３）

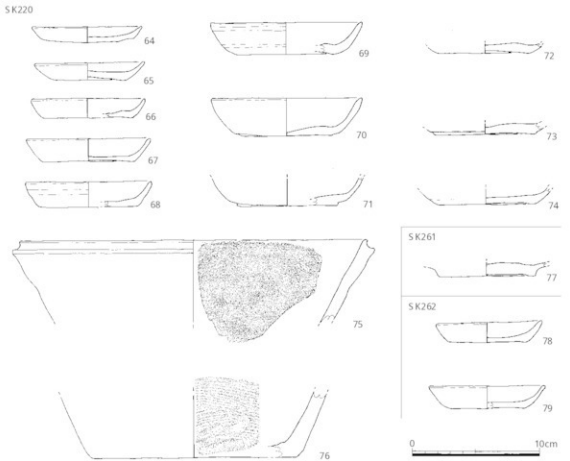
調査区南端付近で検出した、長軸1.5m、短軸1.0mの土坑である。深さは最大10cm程で遺存状況は悪い。土師器の皿・坏・鍋が投棄されていた。

出土遺物（第38図）

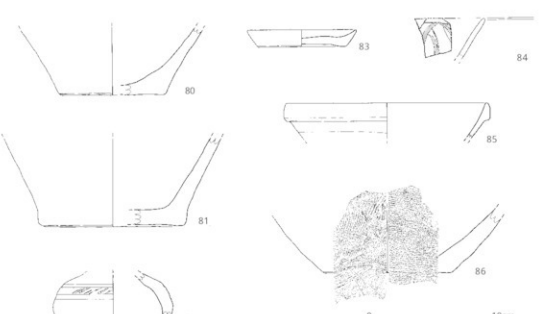
64～68は土師器の皿である。64は復元口径8.7cm、器高1.2cm、65は復元口径8.7cm、器高1.5cm、66は復元口径9.0cm、器高1.5cm、67は復元口径9.8cm、器高1.8cm、68は復元口径8.0cm、器高2.0cmである。いずれも底部外面は回転糸切りで、64・66・67・68には板状圧痕が残る。69～74は土師器の坏である。69は復元口径12.0cm、器高2.5cm、70は復元口径12.0cm、器高3.0cm、71は復元底径8.0cm、器高2.2cm、72は復元底径7.6cm、残存器高0.7cm、73は復元底径8.0cm、残存器高0.8cm、74は復元底径8.0cm、残存器高1.3cmである。いずれも底部外面は回転糸切りで、69・71・72・74には板状圧痕が残る。75は土師質の鍋口縁部である。復元口径27.5cm、残存器高6.5cmを測る。外面には全面に煤が付着している。76は土師質の鉢の底部である。復元底径16.4cm、残存器高5.3cmを測る。内面には横方向のハケメが残る。

SK261（第37図）

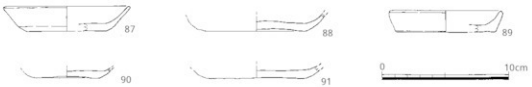
SK220より北に５mほどの地点で検出した、長軸1.7m、短軸0.7mの細長い窪みである。深さは最大30cmを測る。土師器などが少量出土している。



第38図　SK220・261・262出土遺物実測図（1/3）



第39図　SX275出土遺物実測図（1/3）



第40図　ピット出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（第38図）

77は土師器の坏底部である。底径7.6cm、残存器高1.1cmを測る。底部外面は回転糸切りで板状圧痕が残る。

SK262（第37図）

SK261の北東に位置する、長軸1.3m、短軸0.7mの楕円形土坑である。深さは45cmを測る。土師器、白磁椀底部などが少量出土している。

出土遺物（第38図）

78・79は土師器の皿である。78は口径8.4cm、器高1.7cm、79は復元口径9.2cm、器高1.8cmを測る。ともに底部外面は回転糸切りで板状圧痕が残る。

SK263（第37図）

SK262の北側に位置する、長軸1.45m、短軸1.35mの円形土坑である。深さは30cmを測る。土師器小片が少量出土している。

②不明遺構（SX）

SX275（第36図、PL.13－１）

調査区北端で検出した礫層の落ちで、B区南端のSX158と対応して浅い谷を形成する。図上での幅はおよそ10m、深さは60cmである。砂質土、粗砂層が堆積している。弥生時代～中世の遺物が出土している。

出土遺物（第39図）

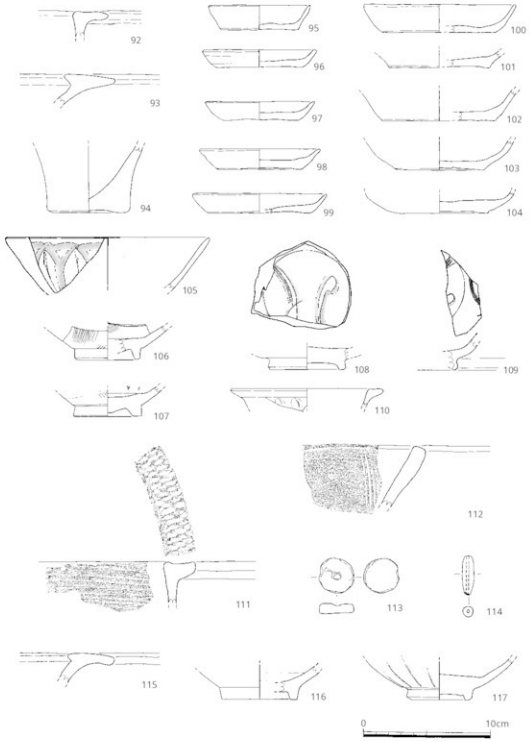
80・81は弥生時代中期の甕底部である。ともに内面の調整はナデ、外面は摩滅のため調整不明である。82は須恵器甕の胴部である。復元胴部最大径は9.4cmで、胴部上位には刺突文が見られる。83は土師器の皿で、外底面は回転糸切りである。84は龍泉窯系青磁碗の口縁部である。釉はオリーブ灰色で、内面には花文を施す。85は白磁椀、類である。復元口径16.3cm、残存器高2.8cmを測る。86は瓦質土器の鉢の底部である。外面にはタテハケ、内面にはヨコハケが残る。

③ピット出土遺物（第40図）

87～91は土師器の皿・坏である。いずれも回転糸切りで、87・88・90には板状圧痕が残る。87・88はSP227、89はSP233、90はSP234、91はSP236からの出土である。

④その他の遺物（第41図、第42図）

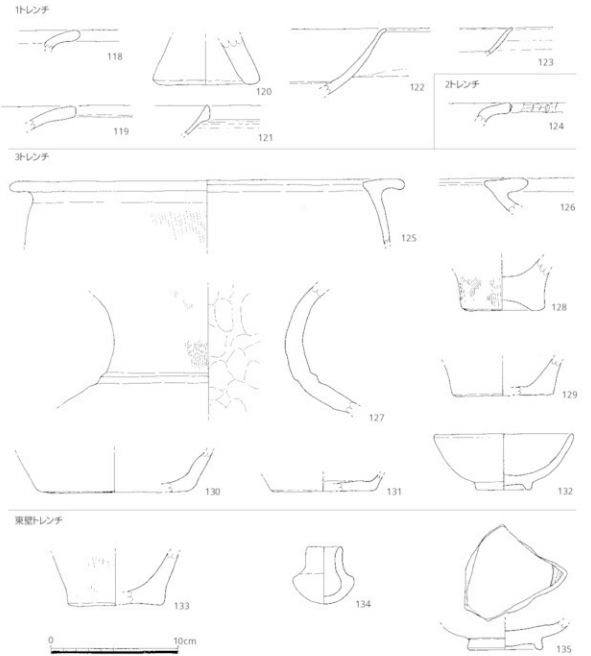
92～114は検出面上層の包含層出土遺物である。92～94は弥生時代中期の土器で、92は断面逆Ｌ字状の甕口縁部、93は鋤先口縁の壺、94はわずかに上げ底の甕底部である。95～99は土師器の皿、100～104は土師器の杯である。105は龍泉窯系青磁椀の口縁部で、外面には鎬蓮弁を施す。復元口径16.0cm、残存器高4.3cm。106・107は同安窯系青磁椀の底部である。ともに櫛目文を施す。108・109は龍泉窯系青磁椀の底部で、ともに内面見込みに花文を施す。110は龍泉窯系青磁坏の口縁部で、復元口径12.0cm、残存器高1.5cmを測る。口縁部上面は平坦面をなし、外面には蓮弁が見られる。111は土師質の鍋で、口縁部上面にはヘラで刻みを施している。外面には煤が付着している。112は土師質の擂鉢口



第41図　包含層出土遺物実測図（1/3）

縁部である。113は円盤状土製品である。径2.9cm、厚みは0.8cmで、片面は中央がわずかに凹む。土器片を再加工したものか。114は土錘である。長さ3.1cm、幅0.9cm。

115～117は検出時の遺物である。115は弥生時代中期の鋤先口縁の壺、116は白磁椀Ⅷ類の底部、117は龍泉窯系青磁椀である。外面には蓮弁を施す。



第42図　トレンチ出土遺物実測図 (1/3)

118 ~ 135はトレンチ出土遺物である。X = 30付近に設定した東西方向のトレンチを 1 トレンチ、そこから 5 mほど南のものを 2 トレンチ、さらに 6 mほど南のものを 3 トレンチとした。その他に東壁際にもトレンチを設定した。118 ~ 123は 1 トレンチからの出土である。118は弥生時代中期の甕、119は広口壺、120は器台である。121・122は白磁椀、123は口禿げの白磁皿である。124は 2 トレンチから出土した弥生時代前期の甕で、端部全面に刻目を施す。125 ~ 132は 3 トレンチからの出土で、そのうち125 ~ 130は弥生時代の土器である。125・126は甕、127は壺の頸部、128・129・130は甕底部である。131は土師器の坏、132は青磁椀で胎土は灰白色、釉は明緑灰色である。133 ~ 135は東壁トレンチからの出土である。133は弥生時代中期の甕底部である。134はミニチュアの壺形土器で、口径2.9cm、器高4.5cm。135は龍泉窯系青磁椀である。底径5.9cm、残存器高2.3cm。内面に花文を施す。

５．Ｄ区の調査

（１）調査の概要

Ｄ区は第４次調査Ｃ区の南側、Ｅ区の北側の地点である。調査対象面積は約780㎡で、実際の調査区は長さ約64m、幅およそ11mの長方形の範囲となった。調査区の中心付近を縦断するラインをＹ＝０、調査区北端から３mほどの杭をＸ＝０として任意に座標を設定した。第43図はＤ区の東壁土層図である。調査前の標高は北半の水田で25.5～25.6m、南半の水田で25.7mであった。現代水田耕作土の下は褐色土、褐灰色砂質土、遺物包含層である黒褐色砂質土、そして検出面とした白色粗砂・褐灰色土などの面となる。検出面の標高は25.0～25.2mである。北端からＸ＝－30付近までは遺構がはっきりと分布するのに対し、Ｘ＝－32以南は全く遺構が見られず、起伏が著しい。

検出した遺構は溝・土坑・ピットなどである。その他に、SX339とした広い範囲の窪地に堆積した包含層もある。弥生土器がある程度出土しているが、遺構の時期はいずれも中世と思われる。

（２）遺構と遺物

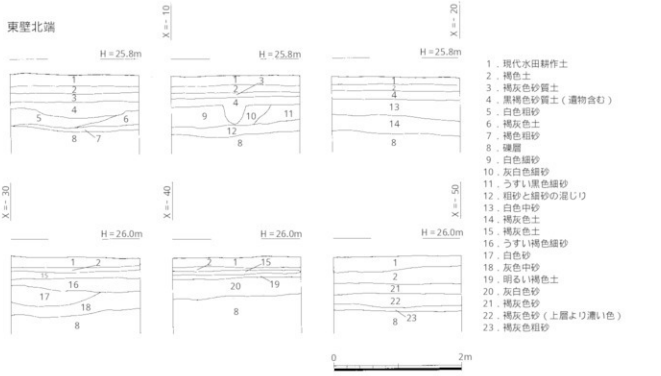
①溝（SD）

SD304（第44図）

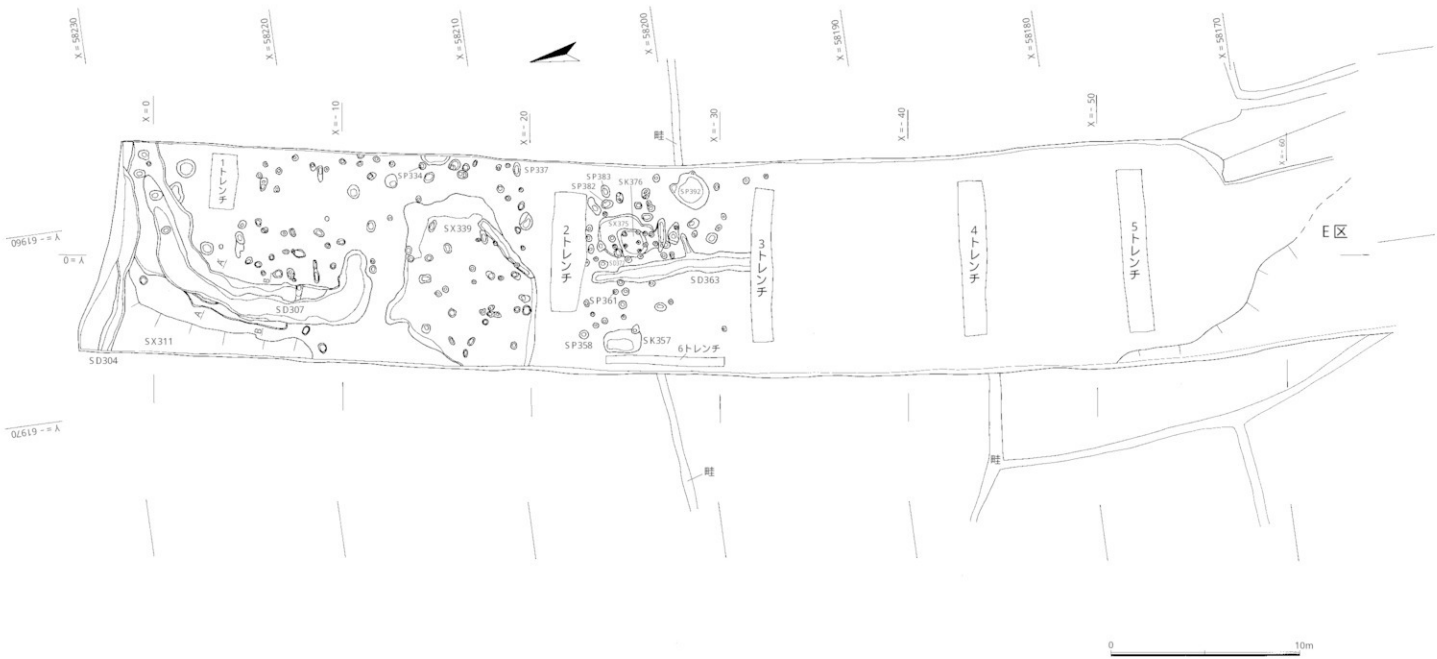
調査区北端を東西に横切る流路である。幅30～50cm、深さ10～30cmで遺存状況は悪い。弥生土器・土師器・陶磁器などが出土している。

出土遺物（第46図）

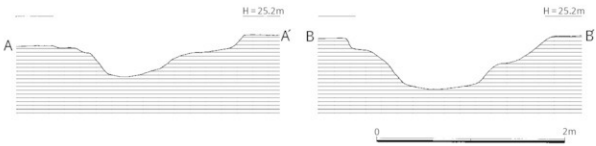
136・137は弥生時代中期の甕の底部である。136は上げ底で、外面には細かいタテハケが残る。138は中世の管状土錘である。139は土師器の皿、140は土師器の坏で、ともに底部外面は回転糸切りである。141は白磁皿の底部で、内面見込みは釉を輪状に掻き取っている。



第43図　Ｄ区東壁土層図（1/60）



第44図　D区全体図（1/200）



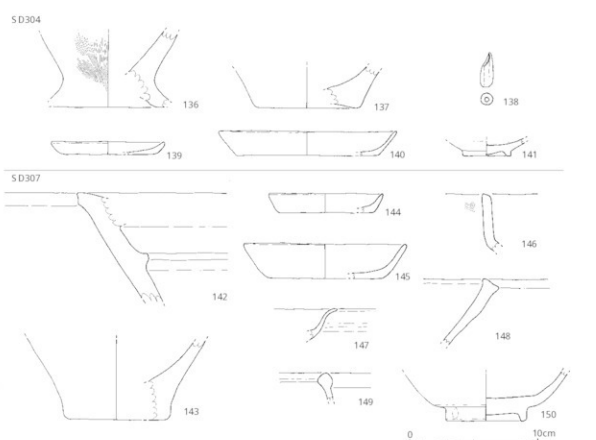
第45図　SD307断面図（1/40）

SD307（第44図、第45図、PL.14－２）

SD304の南で検出した、幅２m、長さ約16mの歪んだコの字状の溝である。深さは最大30cmで、覆土は褐色砂質土である。東に曲がる北端と南端は浅くなっており、本来はさらに東に延びていた溝が削平された可能性もある。弥生土器、中世の土師器、陶磁器などが出土している。

出土遺物（第46図）

142は弥生時代中期の甕口縁部で、口縁下には断面コの字状の突帯が巡る。143は弥生時代中期の甕底部である。144は土師器の皿、145は土師器の坏で、ともに底部外面は回転糸切りである。146は土師器の壺で、直立気味の口縁である。147は白磁の口禿げの皿、148は土師質の鉢の口縁部である。149は陶器の鉢、150は陶器の椀である。胎土は明褐灰色、釉はにぶい黄色である。



第46図　SD304・307出土遺物実測図（1/3）

SD363（第47図）

調査区の中央、X＝－30付近で検出した南北方向の溝である。南端はトレンチで破壊されており確認できなかった。残存長7.5m、幅1.0m、深さ30cm前後である。弥生土器、土師器、白磁、青磁が出土しているが、いずれも小片である。

②土坑（SK）

SK357（第48図）

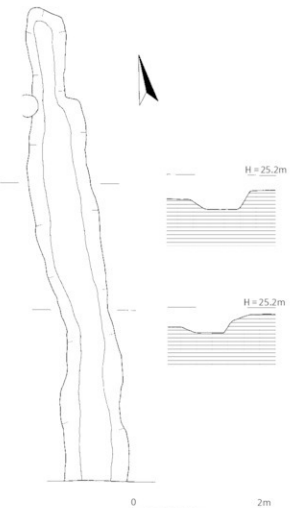
SD363の西側、西壁際で検出した土坑である。長軸２m、短軸1.2mの隅丸長方形の土坑である。深さは40cmである。土師器、瓦器などが出土している。

出土遺物（第49図）

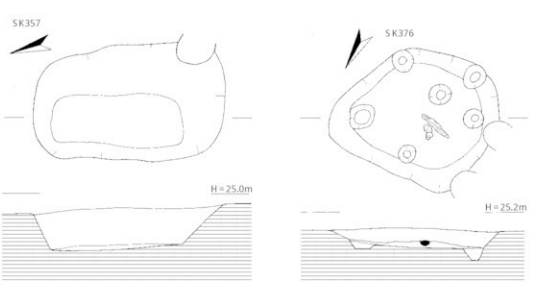
151は土師器の皿で、口径7.8cm、器高2.1cmである。底部外面は回転糸切りで板状圧痕が残る。152は瓦器椀の底部、153は瓦器椀の口縁部である。153は内外面に研磨痕が見られる。154は土師質の鍋で、外面には煤が付着し、内面には細かいヨコハケが見られる。

SK376（第48図）

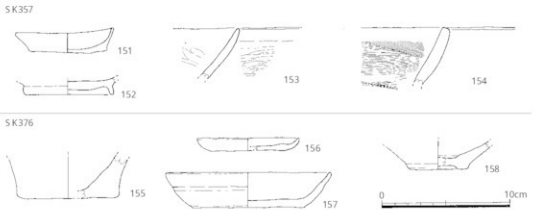
SD363の東側で検出した長軸1.8m、短軸1.5mの土坑である。深さはおよそ20cm。床面付近には炭が見られた。弥生土器、中世の土師器、陶磁器などが出土している。



第47図　SD363実測図（1/60）



第48図　SK357・376実測図（1/40）



第49図　SK357・376出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（第49図）

155は弥生時代中期の甕底部である。156は土師器の皿、157は土師器の坏である。ともに底部外面は回転糸切りで、157は板状圧痕を有する。158は青磁小椀で、外面はほぼ全面に施釉し、畳付だけ釉を削り取っている。

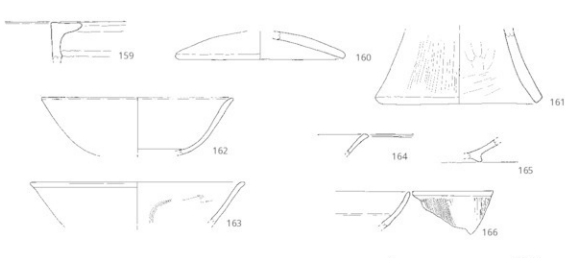
③ピット出土遺物（第50図）

159～161は弥生時代中期の土器である。159は甕口縁部で、SP334からの出土。160は蓋で、SP383より出土した。161は器台の裾部で、外面はタテハケ、内面はナデ調整である。SP382より出土。162～164は白磁椀である。162は口禿げの椀で、SP372より出土した。163は・類の椀で、内面には櫛状工具で施文されている。SP361から出土した。164も内面に櫛状工具で施文されている。SP 392からの出土。165は瓦器椀の底部である。SP392より出土。166は同安窯系青磁椀で、灰オリーブ色の釉がかかる。体部外面には櫛状工具による施文を施す。SP358より出土した。

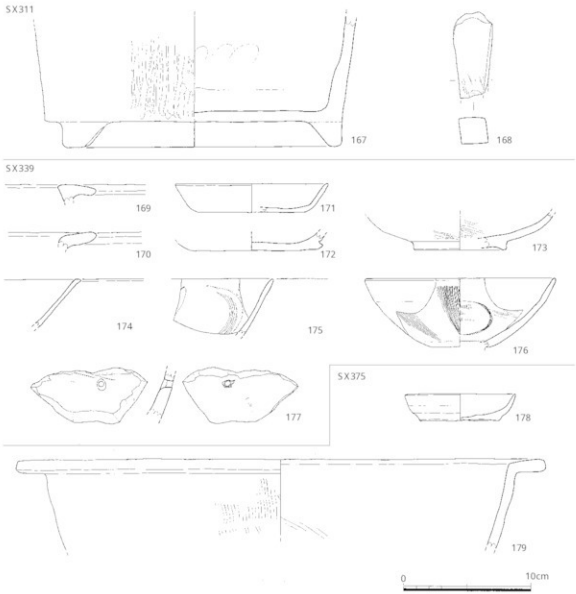
④不明遺構（SX）

SX311（第44図）

調査区北西端で検出した落ちである。西壁の北端から12mまでの範囲で確認した。覆土は褐色砂質土である。土師器、須恵器、陶磁器などが出土しているが、大半は小片である。



第50図　ピット出土遺物実測図（1/3）



第51図　SX311・339・375出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（第51図）

167は瓦質の火舎である。底部の復元径およそ23cm、残存器高10.3cmを測る。脚は3ヶ所につくと思われる。168は砂岩製の砥石である。4面を使用している。

SX339（第44図）

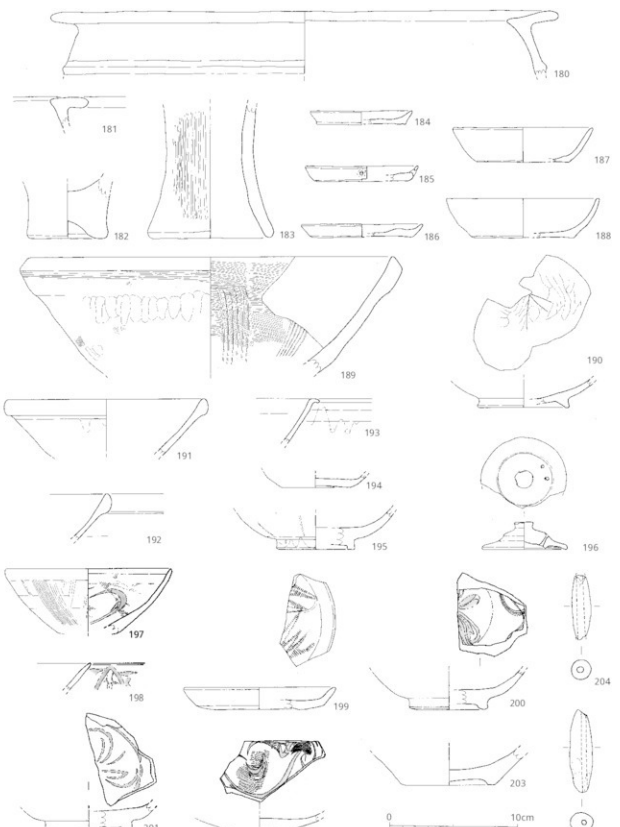
SD307の南側で検出した、長軸9m、短軸7mほどの範囲の窪地に堆積した遺物包含層である。深さは10~30cmで、覆土は黒褐色砂質土である。中世の土師器、瓦器、陶磁器などが出土している。

出土遺物（第51図）

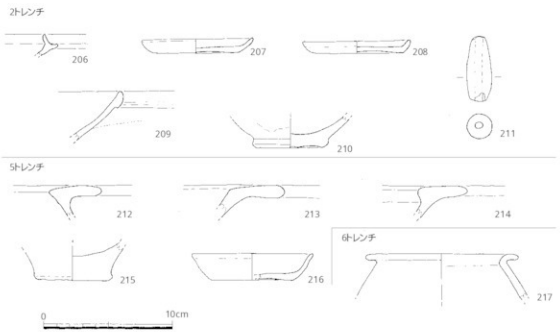
169・170は弥生時代中期の甕口縁部である。171・172は土師器の坏、173は瓦器椀の底部である。174は白磁椀の口縁、175は龍泉窯系青磁椀で内面に花文を施す。176は同安窯系青磁椀で、外面には斜め方向の猫掻き、内面には花文と点描文が施されている。177は滑石製石鍋の胴部である。

SX375（第44図）

SK376の周囲の、黒褐色砂の広がりである。長軸3m、短軸2mほどの範囲に広がる。深さは10cm



第52図　その他の出土遺物実測図（1/3）



第53図　トレンチ出土遺物実測図（1/3）

ほどで浅い。土師器、須恵器、白磁、青磁などが出土している。

出土遺物（第51図）

178は土師器の皿、179は土師質の甕で、復元口径41.8cm、残存器高7.2cmの大型品である。外面には縦方向のハケメが残っている。

⑤その他の出土遺物（第52図、第53図）

第52図は検出時出土遺物、及び遺構から遊離した遺物である。180～183は弥生時代中期の土器である。180・181は甕口縁部、182は甕底部で上げ底である。183は器台で、外面にはタテハケ、内面にはナデを施す。184～186は土師器の皿、187・188は土師器の坏である。いずれも底部外面には回転糸切りの痕跡が残る。185は1ヶ所穿孔が見られる。189は土師質の擂鉢である。復元口径30.0cm、残存器高9.3cm。外面はタテハケのちナデで、胴部中位には指頭の痕跡が見られる。内面は細かいヨコハケの後に6本を一単位とした擂目を施す。190は瓦器椀である。内面はミガキの後に線刻を施す。191・192は白磁椀、類で、玉縁状の口縁を有する。193は白磁椀で、口縁部は短く外側に折れ、内面には沈線がめぐる。194は白磁皿の底部、195は白磁椀底部である。外面には箆押圧縦線が見られる。196は白磁の蓋である。径6.7cm、器高2.2cm。2ヶ所に穿孔を施す。197は同安窯系の青磁椀で、復元口径13.1cm、残存器高5.1cmを測る。外面には斜めの猫掻き、内面には花文と櫛点描文を施す。198は龍泉窯系の青磁椀で、外面には片切り彫りで蓮弁が描かれている。199は同安窯系の青磁皿で、内面見込みには花文と櫛点描文を施す。200・201は龍泉窯系の青磁椀で、ともに内面には花文を施す。202は龍泉窯系の青磁皿で、内面見込みはヘラと櫛状工具で施文している。203は陶器の鉢で、外面にはケズリの痕跡が認められる。204・205は管状土錘である。

第53図は調査区内に設定したトレンチから出土した遺物である。206～211は2トレンチからの出土である。206は須恵器の坏身、207・208は土師器の皿、209は白磁椀の口縁部、210は白磁椀の底部、211は管状土錘である。212～216は5トレンチからの出土である。212～214は弥生時代中期の甕口縁部、215は甕の底部である。216は土師器の坏である。217は6トレンチから出土した弥生時代中期の短頸壺である。外面には丹塗りを施す。

７．Ｅ区の調査

（１）調査の概要

Ｅ区はＤ区の南側延長部分で、道路工事対象地の南端付近に位置する。調査対象面積は約400㎡で、実際の調査区は長さ30m、幅７～10mの長方形の範囲となった。調査区の中心付近を縦断するラインをＸ＝０、調査区北端から４ｍほどの杭をＹ＝０として任意に座標を設定した。Ｅ区の大部分は河川で遺構は見られない。東壁沿いに地山の落ちがあり、Ｄ区に向かって延びる。落ちより西側は河川による白色粗砂の堆積である。河川堆積砂の中にさらにいくつかの流れが確認できたが、掘削を行ったものの、はっきりしたものはなかった。遺物もあまり出土していない。中世の河川と思われる。

第54図はＥ区東壁の土層図である。基本層序は現代水田耕作土、褐色土、Ｄ区から続く褐色砂礫土（検出面）で、検出面の標高は25.0～25.2mである。

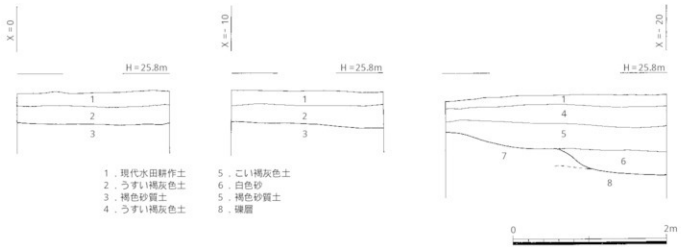
（２）遺構と遺物

SD501（第56図）

地山の落ち際で検出した溝状の堆積である。幅はおよそ２ｍでＤ区に向かって延びる。覆土は黒色細砂である。遺物の出土は少量で、弥生土器、土師器、陶磁器などが見られる。

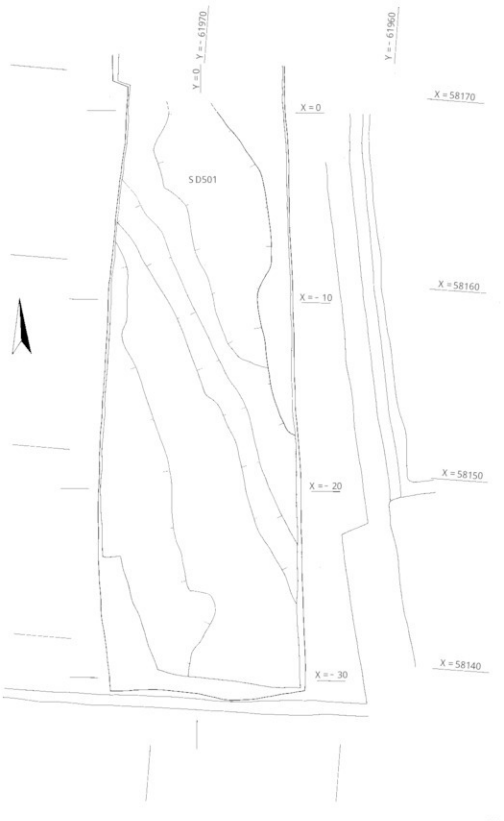
出土遺物（第55図）

218～220は弥生時代中期の土器である。218は甕の口縁部、219は甕の底部である。復元底径8.0cm、残存器高3.1cmを測る。外面にはハケメの痕跡が残る。220は壺の胴部で、Ｍ字状の突帯がめぐる。外面には磨きを施している。221は龍泉窯系青磁碗の口縁部で、黄味を帯びたオリーブ色の釉がかかる。外面には蓮弁が施文されている。222は土師器の坏である。復元底径9.7cm、残存器高0.9cmを測る。底部内面は回転ナデ、外面には回転糸切りの痕跡が残る。



第54図　Ｅ区東壁土層図（1/60）

第55図　SD501出土遺物実測図（1/3）

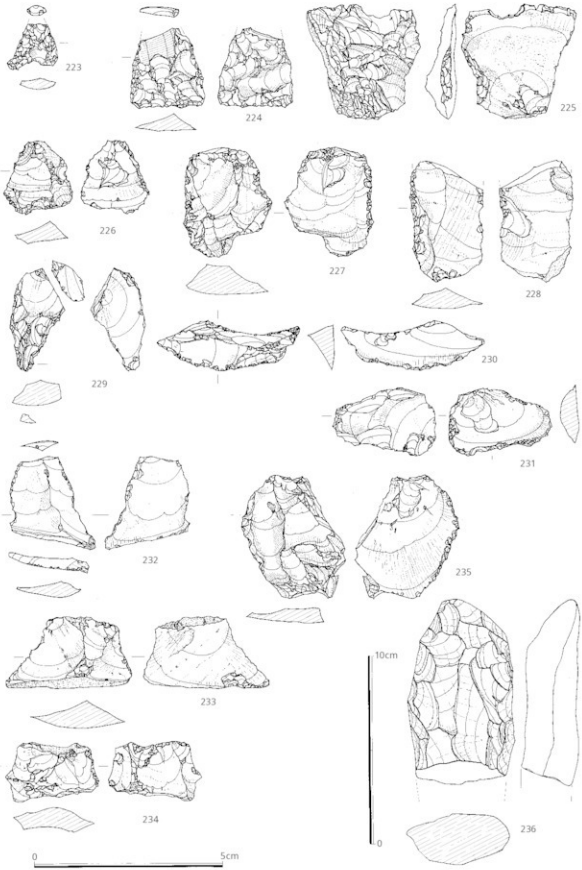


第56図　E 区全体図 (1/200)

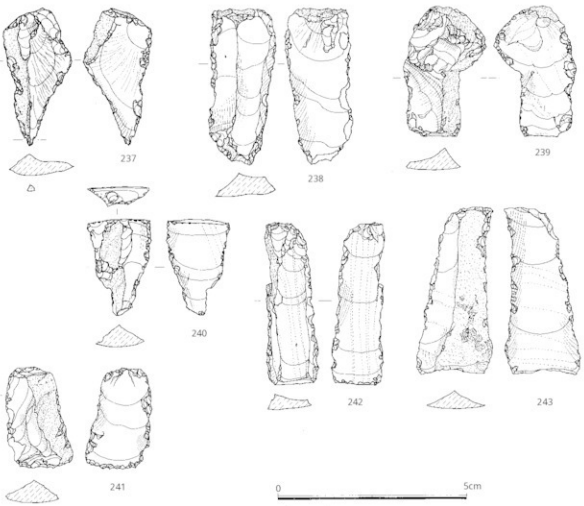
6．石器（第57図～第59図）

224～236はＡ区出土の石器で、236以外は全て黒曜石製である。224は南半の包含層から出土した打製石鏃で、上半部を欠損している。基部は平基。調整途中に折損したものか。残存長2.12cm、幅2.02cm、最大厚0.47cm、重さ2.00gを測る。225は台形様石器で、北半包含層から出土した。右側縁に抉り気味に二次加工を加えている。長さ3.07cm、幅3.07cm、最大厚0.78cm、重さ5.47g。226はSK08から出土した使用痕剥片で、長さ2.00cm、幅1.83cm、最大厚0.55cm、重さ1.61gを測る。左側縁の主要剥離面側に使用による掻器状の剥離が見られる。227は検出時の出土で、長さ2.90cm、幅2.40cm、最大厚0.85cm、重さ5.42gを測る。右側縁を掻器状に、左側縁を削器状に使用している。228はSX03から出土した削器で、縦長剥片の上半を折断したものである。残存長3.02cm、幅1.98cm、最大厚0.54cm、重さ3.53gである。左側縁に二次加工を加え、刃部を作り出している。229は北半包含層から出土した黒曜石製石錐である。長さ2.76cm、幅1.50cm、最大厚0.67cm、重さ2.19gを測る。先端は前面の両側縁に二次加工を加えて、横断面台形に整形している。230～235は使用痕剥片である。230は南半包含層からの出土で、幅広の剥片を用いている。長さ1.33cm、幅3.80cm、最大厚0.63cm、重さ2.33g。下辺は両面微細剥離で削器様に使用されている。231は清掃時の出土で、長さ2.73cm、幅1.82cm、最大厚0.51cm、重さ2.10gを測る。後面の左側縁から右側縁にかけて微細剥離が認められる。232は北半包含層からの出土で、残存長2.50cm、幅2.28cm、最大厚0.41cm、重さ1.79gを測る。右側縁には片面微細剥離が認められ、掻器様に使用にされたと思われる。233も北半包含層からの出土で、長さ1.92cm、幅3.37cm、最大厚0.76cm、重さ3.81gを測る。後面の下辺に剥離が見られる。234は清掃時の出土で、幅広の剥片を用いている。長さ1.60cm、幅2.50cm、最大厚0.51cm、重さ2.16g。右側は片面微細剥離で、掻器様に使用されている。235は検出時の出土で、長さ3.22cm、幅2.12cm、最大厚0.48cm、重さ3.45gを測る。左側縁に微細剥離が見られる。236は今山産玄武岩の打製石斧で、検出時に出土した。下半は欠損している。残存長9.83cm、幅5.70cm、最大厚2.70cm、重さ241.29gである。

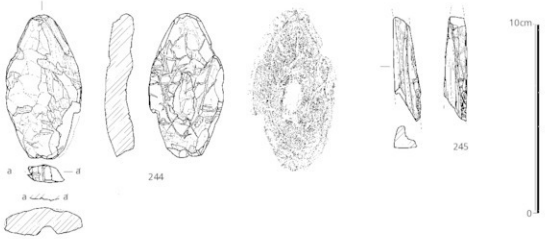
243はＢ区SP125出土の黒曜石使用痕剥片である。長さ4.40cm、幅2.07cm、最大厚0.50cm、重さ3.92gを測る。両側縁に両面微細剥離が見られ、削器様に使用されている。237～241・245はＣ区出土の石器である。237は黒曜石製石錐で、長さ3.62cm、幅1.84cm、最大厚0.60cm、重さ3.23gを測る。先端両側縁には微細剥離が認められる。240は１トレンチから出土した使用痕剥片である。長さ2.53cm、幅1.70cm、最大厚0.60cm、重さ1.92g。右側縁は両面微細剥離で、削器様に使用されている。238・239・241は黒曜石製刃器である。238は検出面上層の包含層から出土した。長さ4.11cm、幅1.80cm、最大厚0.85cm、重さ5.65g。両側縁に二次加工を加えている。239はSX275からの出土で、長さ3.5cm、幅2.2cm、最大厚0.65cm、重さ4.40gを測る。241は３トレンチからの出土で、長さ2.68cm、幅1.80cm、最大厚0.61cm、重さ2.53gである。245は検出面上層の包含層から出土した凝灰岩製の手持ち砥石である。棒柱状で４面が砥面として使用されている。両端を欠損しており、残存長5.55cm、幅1.40cm、最大厚1.25cm、重さ9.56gである。223・242・244はＤ区出土の石器である。223は４トレンチから出土した黒曜石製打製石鏃である。摩滅が著しく、先端を欠損する。残存長1.2cm、幅1.37cm、最大厚0.31cm、重さ0.49gを測る。242はSP337から出土した黒曜石製刃器である。長さ4.30cm、幅1.42cm、最大厚0.41cm、重さ2.86g。両側縁に二次加工を加えている。244はSX339から出土した滑石製品である。前面は削り加工で整形し、裏面は中央部を凹ませ、刻線が見られる。陰石あるいは舟形であろうか。長さ7.6cm、幅4.0cm、最大厚1.45cm、重さ60.21gを測る。



第57図　出土石器実測図①（1/1、1/2）



第58図　出土石器実測図②（1/1）



第59図　出土石器実測図③（1/2）

8．まとめ

今回の調査は道路工事に伴うものであったため狭長な調査区となり、四箇古川遺跡を南北に縦断するかたちとなった。第３次調査も含めると調査区の長さは350mにも及ぶため、地点により遺跡の様相・時期が大きく異なる。以下では調査区を北から大きく３地点に分けて記述し、まとめとしたい。

①礫層上面の縄文時代後・晩期の遺構（第３次１区、第４次Ａ区）
②微高地上の弥生時代前期～中期と中世の遺構（第３次２区、第４次Ｂ区）
③河川埋没後の中世遺構（第４次Ｃ・Ｄ・Ｅ区）

①礫層上面の縄文時代後・晩期の遺構について

四箇古川遺跡周辺は室見川の氾濫による礫層が広がり、調査区北端の第３次１区及び第４次Ａ区ではこの礫層上面で縄文時代後・晩期の遺構が検出された。土坑はいずれも浅い凹み状の不整形なもので、遺物の出土も少ない。明瞭な遺構としては第４次Ａ区で検出した縄文時代晩期前半の埋甕が挙げられる。周辺の四箇遺跡、清末遺跡、田村遺跡では縄文時代後期後半の埋甕が、重留遺跡では晩期の埋甕が確認されており、今回の調査で新たな資料が追加された。調査区周辺には縄文時代の遺構が広がるものと思われ、今後の調査に期待される。検出面とした礫層は厚く、１ｍ以上掘削したが下面は確認できなかった。礫層掘削の際には遺物は出土していない。

②微高地上の弥生時代前期～中期と中世の遺構について

第３次２区及び第４次Ｂ区では礫層の上に黄褐色シルトが乗り、微高地が形成されている。この黄褐色シルトには弥生時代前期～中期と中世の遺構が掘り込まれており、微高地の形成時期は弥生時代以前であることがわかる。この地点では弥生時代の竪穴住居址、掘立柱建物、溝、柱穴など遺構が密に分布する。中世の溝やピットも確認されており、居住に適した微高地上に集落が広がる様子が窺われる。なお、この付近には昔「ふるこうどん（古川どん）」の屋敷があったとのお話を地元の方より伺った。

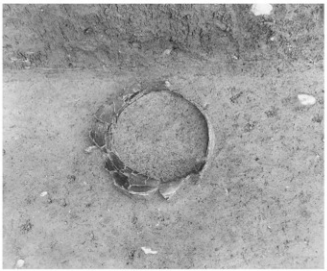
③河川埋没後の中世遺構について

第４次Ｃ・Ｄ区は砂礫層が広がる河川堆積で、この礫層を検出面とした。この礫層は、調査区北端で縄文時代遺構を検出した礫層とは別物と思われ、弥生土器～中世土器を含む。Ｃ区及びＤ区のトレンチ出土遺物から、12～13世紀頃に埋没した河川跡と思われる。そして河川埋没後に溝・土坑・ピットなどが掘り込まれ、生活面が形成されている。これらのＣ区・Ｄ区の遺構は、出土遺物の種類や法量から13～14世紀頃のものと思われる。調査終了後に重機で堆積した砂礫層の深掘りを行ったが、下面は確認できなかった。調査区南端のＥ区で検出した白色砂が堆積する河川は、Ｃ・Ｄ区の生活面よりもさらに新しいものと思われる。

Ｅ区南側の道路延長部分に当たる第１次調査地点では、15世紀代の河川と、河川埋没後の近世生活面が確認されており、第４次Ｃ・Ｄ・Ｅ区と似た様相である。一方、Ｅ区南東の第２次地点では耕作土直下で黄褐色粘質土が検出され、微高地上の中世集落が確認されている。東隣の四箇船石遺跡でも微高地と河川跡が確認されており、この一帯は室見川の度重なる氾濫に見舞われていた状況が窺われる。四箇古川遺跡はその名の通り河川跡と微高地上の集落からなる遺跡で、縄文時代遺構の広がりと微高地範囲の把握が今後の課題であろう。

1．A区遠景（北より）

2．A区全景（北より）



1．A区埋甕①（西より）

2．A区埋甕②（西より）

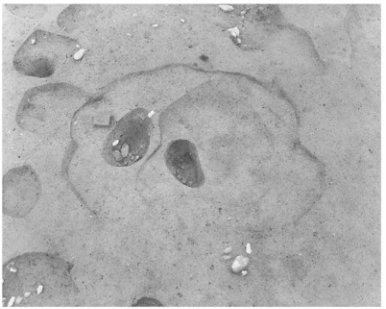
3．A区埋甕③（西より）

4．A区埋甕④（西より）

5．A区埋甕⑤（西より）

6．A区埋甕⑥（西より）

1．SK03（北より）



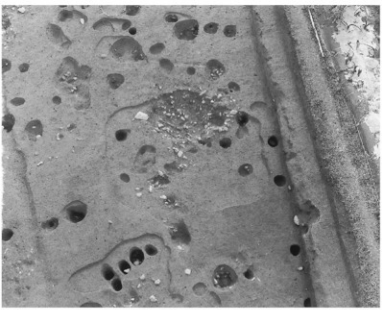
2．SK09・10・11（東より）

3．B区・C区遠景（北より）

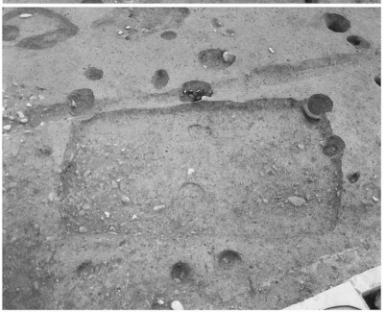
1．B区と飯盛山（東より）

2．B区北半全景（北より）

3．B区南半全景（北より）



1 . SC103 (北より)



2 . SC108 (東より)

3 . SD128 (東より)

PL．12

1．B区・C区遠景（南より）

2．C区全景（上が南）

3．SK220（西より）

1 . SX275土層 (西より)

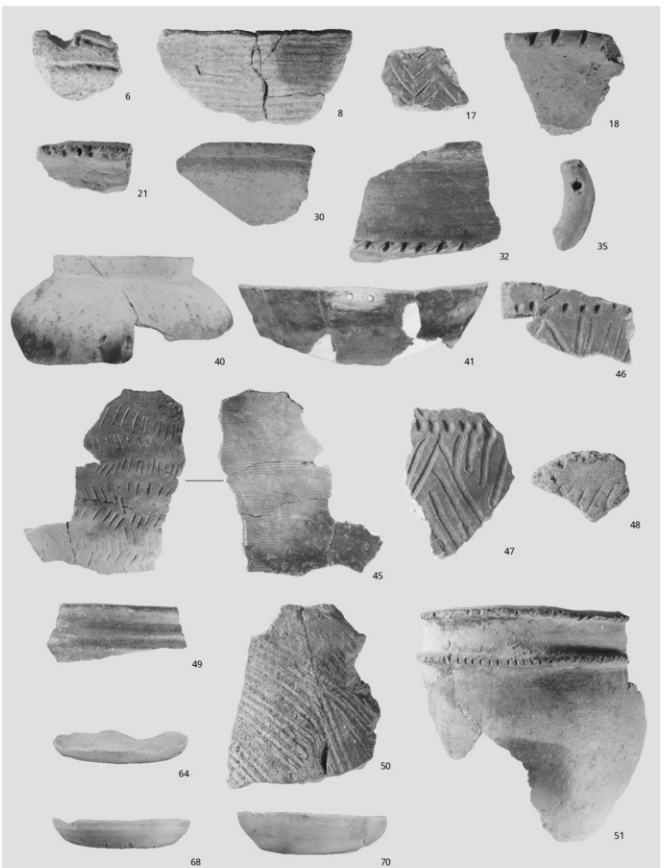
2 . D区・E区遠景 (北より)

3 . D区全景 (上が南)

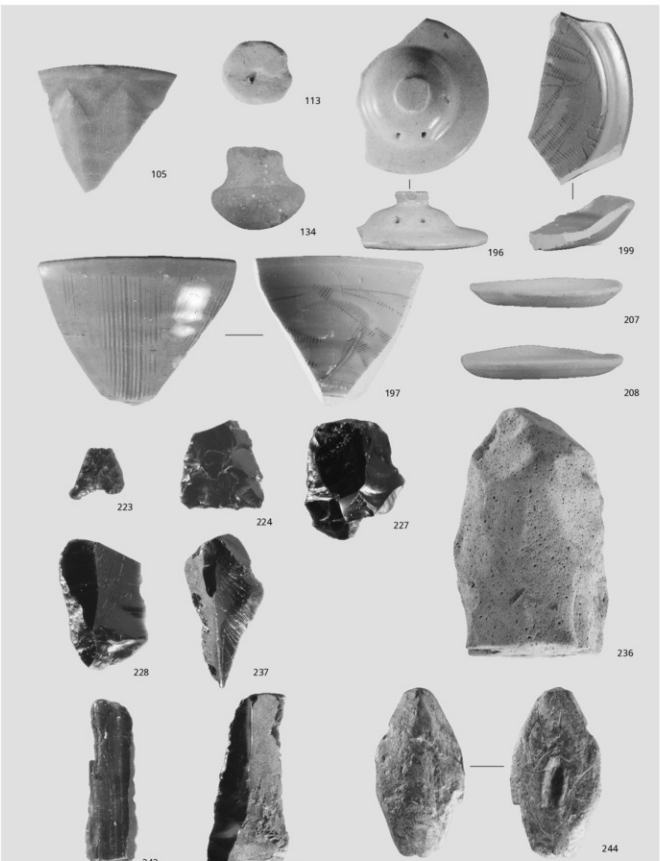
1．D区と飯盛山（東より）

2．SD307（北より）

3．E区全景（上が南）



出土遺物Ⅰ（縮尺不同）


105
113
134
196
199
197
207
208
223
224
227
236
228
237
242
243
244

出土遺物Ⅱ（縮尺不同）

報告書抄録

ふりがな	しかふるかわいせき 1		
書名	四箇古川遺跡 1		
副書名	第 3 次・第 4 次調査報告		
巻次			
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	1077		
編著者名	阿部泰之・今井隆博		
編集機関	福岡市教育委員会		
所在地	〒810-8621福岡市中央区天神1丁目8－1		
発行年月日	2010年3月23日		
ふりがな	しかふるかわいせき		
所収遺跡名	四箇古川遺跡		
ふりがな	ふくおかしさわらくしか 4・5 ちょうめ		
所在地	福岡市早良区四箇 4・5 丁目		
市町村コード	40137	遺跡番号	0336
北緯	33° 31′ 39″	東経	130° 19′ 55″
調査原因	道路改良工事		
第 3 次調査			
調査期間	2008.2.4～2008.3.31	調査面積	600㎡
第 4 次調査			
調査期間	2008.10.1～2009.3.10	調査面積	2200㎡
要約	四箇古川遺跡の中心を縦断する350mに及ぶ調査区で、地点により遺跡の様相が大きく異なる。遺跡の北端付近では縄文時代後期～晩期の遺構が分布し、埋機を検出した。遺跡の中央北寄り付近は微高地となり、弥生時代前期～中期の竪穴住居・掘立柱建物と中世遺構を検出した。遺跡中央以南は河川で、埋没後に部分的に中世の集落が展開している。		

四箇古川遺跡 1

－ 第3次・第4次調査報告 －

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1077集

2010年(平成22年)3月23日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1
TEL(092)711-4667

印刷 石橋印刷株式会社
福岡市博多区東比恵 3 丁目21番10号
TEL(092)411- 0544